
ジョーンブリヤン

彩杉 厚智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーンブリヤン

【Nコード】

N0326Z

【作者名】

彩杉 厚智

【あらすじ】

光太郎は中学三年生。母、葵の見舞いを日課として暑い夏を過ごしていた。葵は2年前に交通事故に遭っていた。そのとき幸い一命は取り留めたものの脳に影響が残り毎日午後4時半頃に目を覚ますが2時間経つと眠ってしまうという特異な症状を抱え入院生活を続けていた。そんな光太郎が迎えた高校受験まであと半年という二学期の初日。クラスに佐伯という名の大人びた外見で他人を寄せ付けない秀囲気をまとった女子生徒が転入してきた。美術を強く志す佐伯は美術部OBの光太郎に部に入るにはどうしたら良いかと持ち

かけてきたため幽霊部員だった光太郎は困惑しながらも何かと世話を焼き、勉強まで教えることになってしまった……。中学生の拙い初恋と夢をテーマに。

自転車が揺れるたびにカゴに入れた一輪の小ぶりなひまわりがイヤヤをするように左右に顔を振る。

もつと優しく扱ってよ、ただでさえ暑いんだから。

そんな声が聞こえてくるようで僕はハンドルを握る両手にさらに力を込めた。ひまわりには申し訳ないがスピードを緩めるわけにはいかない。僕にできることは汗で滑りそうになるハンドルをしつかり握り少しでも自転車の揺れを少なくすることだけだった。

巨大に膨れ上がった夏の太陽が轟々と音を立てて熱波を送ってくる。

その太陽を正面に見据えて突き進む自分の姿に僕はイカ口スを思い浮かべる。警告を無視して太陽に近づきすぎ羽を失って墜落したギリシャ神話の孝行息子。スチール製の自転車もこの暑さの前では蠟のように溶けてしまいそうだった。

そう言えば昨日父に「明日からまた暑くなるらしいから熱中症に気をつけるよ」って言われたんだっただけ。

確かにまとわりついてくる空気の熱さは尋常ではない。自転車を漕げば漕ぐほど体温は上昇し頭の奥がぼーっとしてくる。

僕は一旦自転車を止め肩から襷に掛けたスポーツバッグからペットボトルのコーラを取り出した。半分ほど残っていた黒い液体を喉に流し込む。

先ほど買ったばかりなのにすでに湯気が出そうなほど熱くなっていて甘ったるいだけで清涼感はない。

病室の備え付けの冷蔵庫で冷やしななおそうかとも考えたが僕はそのままペットボトルの底を空に向けて飲みほした。身体に悪いからと炭酸ジュース嫌いの母さんの目にとまればまた小言を言われるに違いない。

とりあえず水分補給という作業を完了し僕はペダルを強く踏み込ん

だ。

間もなく五時だ。母さんはもう目覚めているかもしれない。

僕はどんどん加速した。両手を広げればそのまま空へ浮き上がりそうなくらいにスピードを上げた。勢いそのままに駐輪場に突進する。

病院に駆け込み仁科葵とネームプレートの掛かった母の病室の前に立つともう一つ奥の病室のドアが開き、若い看護婦が大きな花束と空の花瓶を抱えて出てきた。

反射的に僕は手にしたひまわりを後ろ手に回してその女性とすれ違う。彼女が手にしている絢爛たる花々と比べると僕の萎れ気味のひまわりはやけにみすばらしく見えた。

ひまわりの一輪挿しなど余計に病室を寂しくさせるだろうか。しかも大分くたびれてきているし。

僕は頼りなさげに見える細い茎を弄んでひまわりをくるくると回してみる。

「可愛らしいひまわりね」

声の方を振り返ると花束と花瓶を抱えたままの先ほどの看護婦がにっこりと笑いかけてくれた。

僕はその笑顔に少し勇気をもらって小さく頷くと母さんの待つ病室のドアに手を掛けた。

「光太郎っ！」顔をのぞかせると待っていたとばかりに窓際に立っていた母さんが声を掛けてきた。「早く、こっちこっち」

「起きてたんだ。ごめん、遅くなって」

「そんなこといいから、早く早く」

母さんは無邪気な声で僕を呼ぶ。それはまるで新しい洋服をデパートに買いに来た少女のようだった。窓から入り込む西日に頬を輝かせた母さん。そのコロコロと響く声は入院患者とは思えない陽気さだ。ここが病室でなく、母さんがパジャマを着ていなければ誰も母さんのことを病人だとは思わないだろう。

「ほら、あそこ」

母さんが指さした窓外の病院の壁になにやら茶色い小さなものが見える。あの形は昆虫のようだ。

「蝉の抜け殻？」

「そうよ。きつと昨夜のうちに幼虫がこんなところまでえっちらおっちら上がってきて、ここで羽化したのよ。見たかったわね、蝉が殻を破って飛び立っていくとこ」

「そんなの」

見たくないよ、と言いかけて僕は口を噤んだ。

どちらかと言うと母さんは虫が苦手だったはずだ。僕がつかまえてきた小さなてんとう虫が家の中を飛び回っただけでパニックになったし、ゴキブリなんか見るのも嫌で絶対に新聞紙で叩けない。カブトムシやクワガタはそのゴキブリの親戚だと言っときかない。そんな母さんが昆虫の羽化の瞬間を見たいと言っていることに切ない気持ちになる。

きつと母さんにとってこの病室での生活がそれほどに味気なく張り合いに欠けるものなのだ。

「あら、ひまわり。小ぶりでかわいい！」

母さんの笑顔が一層明るくなる。

その表情に僕は心の中で快哉を叫ぶ。

母親を見上げる無邪気な幼児のように健気に太陽に顔を向け続けるひまわり。それは母さんの大好きな花だ。だから僕はこの季節には通学路や校庭でひまわりが咲いているのを見つけると罪悪感に苛まれながらも必ず失敬してくる。

「あ、早く活けなきゃ」

僕はベッド脇の四角くて細長いガラスの花瓶を掴んで洗面所に向かう。

すっかり俯いてしまっているひまわりを水に差し部屋に戻ると白衣を着た医師がベッドの脇に立っていた。

ベッドの上に座り血圧を測られている母さんが医師の向こうから小さく手を振る。

僕は、こんにちは、と医師に挨拶をして花瓶を窓際に置き処置が終わるのを待つ。

ピピピと電子音が鳴る。母さんが脇から体温計を取り出すと、医師は無言で受け取って病室から出て行った。

入れ替わりに僕が母さんの横に移動してパイプ椅子に腰を下ろす。

「あの先生、独身かしら？」

母さんは少し乱れたパジャマを直しながら医師が出て行ったドアに目をやる。

「さあ」

「あんなに大人しくつちゃ一緒にいても面白みがないわよね」

「でもお医者さんって儲かるでしょ。だったら結婚したい人もいるんじゃない？」

何の気もなしにそう言うのと母さんはじつと僕の眼を覗き込んできた。

「中学生の光太郎には分からないかもしれないけど、お金じゃないのよ、夫婦って」

将来を憂うような重い口調で言われても困るって。一般論として思いつきで言っただけなんだから。

僕は話を変えるためにスポーツバッグの中を漁った。本屋の袋を取り出し母さんの膝の上あたりに置く。

「はい、これ」

「ありがとう。いつも悪いわねえ」

全然悪いとは思っていない調子で母さんがにんまり笑う。

中身は三十代の主婦層をターゲットにしたファッション雑誌だ。毎月これを買うのが僕の一番手を焼く任務と言える。

買い始めて二年近くになるが未だにコンビニエンスストアのレジでは赤面してしまつて店員さんの顔をまともに見ることができない。しかしそんなことはあっけらかんとした性格の母さんはきつと思ってもよらないだろう。

工口本を買うのとどっちが恥かしいかな。友達から借りることは

あつても自分で買ったことはないから分からないけど。

「あら、こつこついうのってかわいいわね。ね？ね？」

母さんは早速雑誌をペラペラめくり出し、気に入ったものを見せ
てくる。

しかし中学三年生の僕は同世代の女子がどんな流行を追っている
のかも理解の外。もちろん三十代の主婦の恰好に良し悪しを言える
ほどのファッションセンスを持ち合わせているわけがない。決まっ
て上辺だけの「そつだね」を使うのだが、母さんは僕がどうこつこつ言
うのを期待しているわけではないようだ。鼻歌交じりに次々とペー
ジを繰っていく。

母親の若作り。見ているこつこちが落ち着かない気分になるから、
「母さんはもう四十過ぎてるじゃん」って毒を吐きたくなるけど、
やめておく。ずっと病室でパジャマ生活の母さんにとってこの雑誌
の中の世界ってどんな風に見えるのかな。そう考えるとじりじりと
胸が痛い。

「そつ言えば明日から二学期ね」

一通り目を通して気が済んだのか雑誌を閉じて母さんが少し遠い
目をして微笑む。毎日院内だけの生活の母さんが今日で夏休みが最
後だということに気づいていたことに僕は少し驚いた。

「そつだよ。って言ってもこの一週間毎日補習授業で学校通ってた
からあんまり新しい学期が始まるって感じはしないけど」

「どこ受けるか決めたの？」

「高校のこと？」

「他に何か受けるものある？」

「そりゃそつだけど……」僕は少し間をとって口を開いた。「K
高かなって思ってる」

僕は近くの県立の高校の名前を挙げた。この辺りの公立の中では
一番レベルが高いが僕の成績なら落ちることはないという自信はあ
る。

「どつこつしてっ」

意外にも母さんはまるで嫌いなピーマンを病院食の中から見つけたときのような苦い顔をした。僕の答えに納得していないようだ。た。

何故だろう。僕の学力を心配しているのだろうか。

「どうしてってレベル的に大丈夫だと思うから」

「T学園じゃなくて良いの？」

母の言葉に僕は不意を突かれたような気持ちになった。

T学園は県内屈指の全国的にも名の知れた私立の進学校だ。僕が通っている中学校からも毎年二、三人は進学しているようだが、僕の今の成績では客観的に見て合格できるかどうか怪しい。

「ちよつと厳しいかな」

「何が？」

「俺の頭では」

「そうなの？」

「そうだよ」

「光太郎って頭いいんでしょ？」

「そんなことないよ」直球でそんな風に訊かれると否定するしかないじゃないか。「とにかくT学園は俺にはレベルが高いの」

母さんはまだどこか不満そうだった。

一人息子をT学園に、と期待していたのだろうか。そんな教育ママだったっけ、この人。

正直、今、母さんにT学園って言われるまで僕はあまりその学校を意識していなかった。受験まであと半年しかない。それなのに来年どこの高校に通うかぼくはまだ真剣に考えたことがなくて、漠然とだけどK高に行くんだろうなって思いこんでいた。

「本当は、お金のことなんじゃないの？」

そういうことか。母さんが気にしているのは、うちは余裕がないからって理由で僕が私立のT学園を諦めたんじゃないかってことみたいだ。

「もう少し頭の出来が良かったら頼み込んででも行かせてもらおう

「ただどね」

僕は今、親に二つ嘘をついた。

一つは頭のこと。

今の僕の学力から判断してT学園は、全然歯が立たないってわけではない。残り数カ月、死に物狂いで勉強すれば何とかなるかもしれない。今の時点で厳しいからと見切りをつけるのは時期尚早だ。

もう一つは意気込み。

他の同級生も同じだと思うけど、僕は高校に対してあまり興味を持っていない。K高に行つたつて、T学園に通つたつて人生そんなに変わらないだろうつて思っている。

中学三年生の僕にはまだ人生の目標なんて全然見据えられていないし、こんなことをやりたいからつていう明確な志望動機を高校に対して持つていない。自分の学力レベルにあつた分相応の高校。そういう物差しでしか高校選びなんてできない。だからたとえ頭の出来が良くても頼み込んでまでしてT学園に行きたいかどうかは分からない。

母さんにT学園の名前をあげられたとき、僕の体は軽い拒否反応を示して反射的に否定的な言葉を発していた。きつと頭の中で、T学園に行くにはこれから毎日毎日しんどい思いをして机に齧りつかなくてはいけないことだとか、K高ならうちの中学校から二、三十人は行くけどT学園に入つたら知らない人ばかりで寂しそうだとかいうつまらないマイナスなイメージを作り上げてしまったのだから。

まあ僕の高校進学への想いというのはこの程度のものなのだ。

でも母さんはとりあえず納得したようだった。

「くれぐれもお金のことは心配しないでね。そういうのは何とでもなるんだから。・・・じゃあ、少し横になるね」

母さんは瞼の重さに耐えきれない様子でベッドの中に横たわった。時計を見ると六時半を過ぎたところだった。

顔を戻すともうすでに母さんは静かに寝息を立て始めていた。

窓の外はまだまだ夏真っ盛りだ。朝っぱらから辟易とするほどの暴力的な強い日差しには教室の安っぽいカーテンではとても歯が立たない。

窓際に座る僕の特に左半身はカリカリと焼けて今にも身体の中の何か融け出しそうだ。

「おはようございます。みんな、元気そうね。安心したわ。夏休みの間、怪我とか病気とかした人はいないみたいね」

担任の坂本先生はこの暑いのにブラウスの上にカーディガンを羽織っている。冬になると、モコモコとこれでもかと言うほど重ね着をして、しきりに両手をこすり合わせたり足踏みをしたりする極度の冷え症だ。まだぎりぎり二十代だったと思うが中学生の僕から見ても色気がない。

「俺は心に傷を負ったよ」

教室の一番後ろの席からクラス一の調子者の遠藤が茶々を入れる。

「遠藤君、どういうこと？」

「彼女に振られたってことさ」

教室内が一気に沸く。

かわいそう。良い気味だ。原因は何？彼女って誰だったの？そもそもお前、彼女いたんだっけ。色々な声が錯綜する。

「それはそれは。中学最後の夏休みの思い出としては少しセンチメンタルね」

「俺の夏は早々と終わったわけさ。先生はどうだった？」

「何が？」

「今年の夏は彼氏できた？」

再びどつと歓声上がる。クラス全員が目を爛々と輝かせて教壇に顔を向ける。

「先生のことはいいのよ。先生のごことは・・・」

まさかの展開という感じで坂本先生は教卓に目を落としチヨーク箱や出席簿に意味もなく手を伸ばしたり髪を掻きあげたりとしどろもどろになっている。

彼氏できたの？彼氏と海に行つた？何やってる人？芸能人で言えば誰に似てるの？

四方八方から火の手が上がり四面楚歌という感じの教室に坂本先生の顔が引きつる。

「彼氏なんかそう簡単にできないわよ」

芝居つぼくがつくりと教卓に手をついて見せた担任教師に生徒たちは追い打ちをかける。

「今年の夏も一人だつたんだ。かわいそ」

「山田、お前付き合つてやれよ」

「坂本先生なら俺は構わないけど」

教室内が笑いの渦となる。ホームルームからこんなに盛り上がっているのはうちのクラスだけだろう。そろそろ隣のクラスの担任からクレームが飛んできそうだ。

「もう、私のことはいいから静かにして。今日は皆さんに特別に報告しないといけないことがあるのよ」

さすがに坂本先生の声にも怒りの色がこもってきて、敏感な生徒たちはぴたつと口を噤む。

普段は柔和な彼女も数年前に一度キレたことがあつたようだ。言うことを全く聞かない男子生徒を思い切り平手打ちにしその生徒が口の中を出血してカッターシャツがどんどん赤く染まっただけなのに保健室に行くことも許さず平然と最後まで授業を進めたという伝説を誰もが知っている。彼女は空手の有段者だという噂がまことしやかに流れている。

「今日からこのクラスに新しいメンバーが加わるの。佐伯さん、入つて」

名前を呼ばれてゆつくりとドアから現れたのはハツとするほど白い肌の少女だつた。

彼女は緊張している様子もなく堂々と胸を反らせて手招きする教師に近づいた。教卓と黒板の間に立つ。サツと正面を向く。

瞳を隠す長い前髪。表情を殺した緩まない頬。彼女は唇だけを動かしてハキハキと挨拶をした。

「佐伯杏奈です。よろしくお願いします」

軽くお辞儀をするやすぐに顔を上げ睥睨するように右から左へと視線を飛ばす彼女。

クラス全体がビクツと固まる。少なくとも僕は彼女の顔がこちらを向いたときに慄然としてその瞬間は暑さを忘れ思わず背筋を伸ばしていた。

すわりとしたスタイルの良さと中学生とは思えない大人びた顔つき。彼女は隣にいる坂本先生がかわいそうに思えるぐらい色っぽい。そのひんやりとした美しさのためか容易には近づきがたい雰囲気がある。

「ということ、今日から同じクラスメイトとして皆さん仲良くねじゃあ、佐伯さんはあそこに座って」

坂本先生が指したのは窓際の最後、僕の後ろの席だった。そう言えば朝教室に入ってきたときに、こんなところに机あったっけ、と思っただ覚えがある。

しかし、まさか中学三年の二学期に転入生が現れるとは思ってもいなかった。

転入生には何かしらの事情がつきものだが、卒業まで半年ほどのこの時期には佐伯家に余程の事情があったのだろう。しかし、そんなことを訊こうものならどういいう仕打ちが返ってくるか分からないという不気味さを彼女はオーラとして纏っている。

顎を引き涼しい顔つきできびきびと彼女が僕の方に向かって歩いてくる。

僕は何となく視線を合わせてはいけないような気がして机に目を落とした。横を通り過ぎた彼女が作る空気の流れが妙に冷たくてこの暑いなか僕の腕に鳥肌が立った。

「おい、光太郎」

下駄箱に向かって廊下を歩く僕の背中にクラスメイトの松本陽平の声が追いかけてくる。

彼はサッカー部のキャプテンを務めていた。この夏で部活動は引退した格好だが、県選抜の実力を持つ彼は高校へはスポーツ推薦での進学が決まっただけで夏休み中も後輩たちに混じって練習を続けていたようだ。おかげで陽平は三年生の中では誰よりもこんがり日焼けしていた。

そう言えば陽平が進学するのは母さんが口にしたあのT学園だ。

T学園はそのブランド化されたと言っても良い知名度を維持するためこれまでの学力重視の方針を転換し近年はスポーツの面にも力を注ぎ少子化の現代でも生徒集めに不安はないと評判だ。僕もT学園を受験し合格すれば校内に陽平という知り合いは確保することができる。しかし、スポーツ推薦の生徒と一般試験での合格者は同じクラスにはならないから孤立感を拭うことには全然つながらない。

「何？」

「今から、沙織たちとカラオケ行くけど、来ないか？」

隣のクラスの沙織は清纯や可憐という言葉がぴったりな学年で、いや、校内で一番の美少女だ。そんな沙織とお近づきになれるシチュエーションが僕の胸にもたらした波動は決して小さくはない。だが、僕は表面上はそれを平然と押し殺した。

運動神経抜群でしかも聡明な顔立ちの陽平は女子からもてる。毎年バレンタインデーにはアイドル顔負けの到底一人では食べきれない量のチョコレートをもたらしている。来年3月の卒業式には陽平の周囲でいったいどんな騒ぎが起きるのだろうと羨ましいような怖いような気分で想像するのは僕だけではないはずだ。その陽平の口から沙織の名前を聞いて僕には負け惜しみではなく素直に二人がお似

合いだと思つた。そんなところにお邪魔してもいたたまれないだけのような気がする。

「サッカーは？」

「たまにはサッカーから離れて気晴らしするのも重要なんだよ」

「陽平の人生において？」

僕は意地悪そうに笑う。しかし、陽平はいたって真面目な顔つきで頷いた。

「そう。俺の人生において」

陽平とは二年生のとき初めて同じクラスになって話すようになった。4月のクラス替えで隣の席になり、5月、6月とくじ引きで席替えをしたのに三ヶ月連続で左右隣同士になって陽平が声を掛けてきたのだ。

「この三ヶ月隣同士になつたけど、これってお互いの人生においてどういう意味を持つことになるんだろうな？」

比較対象にするのもおこがましい程のイケメンからいきなり席順の人生における意味を問われて僕はただただ困惑した。しかし、どれだけ考えても僕の頭の中には一つの熟語しか浮かんでこなかった。「偶然じゃない？」

口に出してから後悔した。

偶然。なんと空虚な響き。

折角我が校のアイドルと仲良くなれるチャンスだったのに、面白みに欠ける奴だと思われたのではないだろうか。

僕は陽平の次の言葉を固唾を飲んで待った。彼は黒板を睨みながら腕組みをして押し黙ってしまった。

「じゃあさ、来月も隣同士になつたとしたらどう思う？」

漸く口を開いた陽平はさらに僕を試してきた。

僕は陽平の真意を測りかねていた。彼はこの自分でも嫌になるくらい平凡な容姿の僕をからかっているのだろうか。いや、何故かは分からないが僕は今彼に試されているのだ。誰かこの質問の本当の意味を教えてください。いったい正解は何なのか。

僕は自棄気味に口を開いた。

「奇跡じゃないかな」

一瞬「だよー」と言っただけで僕の手を取るかと期待した。しかし陽平は僕の答えに何の感慨も示さず低い声で「そこまでは言えないな」と呟いただけだった。

ドキドキしながら待った7月の席替えで僕の席はとうとう陽平の横から外れた。前後になってしまったのだ。

僕の前の席に座った陽平はにっこりと振り返りやっぱり問いかけしてきた。

「これはどういう意味なんだ？」

「縁、だと思っ」

縁か。縁ね。

陽平は今回は満足そうに頷いて正面に向き直った。

それから陽平は身の回りの物事について意味を僕に問いかけてくるようになった。

晴天が十日続いた意味。新しく使い始めたばかりの消しゴムを失くしてしまった意味。オリンピックが四年に一回である意味。

それを僕は真面目に考える振りをしながら思いつきで適当に答える。その返答に彼は大抵はどこかつまらなさそうに頷くだけなのだが、ときおり琴線に触れるのが男の僕でさえ蕩けてしまいそうな甘い笑顔を見せてくれることがある。僕の答えのどこがどんな風に良かったのかは全くこちらに伝わっては来ないのだが、その笑顔の瞬間には心の中でガッツポーズしてしまう。

将来はプロのサッカー選手になると公言しそのための努力を惜しまない陽平を僕は心から尊敬しているが、そんなやり取りを通して僕は単なる運動馬鹿ではない哲学的な面を見せる彼を愛していた。そう言えば今の席は僕が窓際で彼が廊下側と目も合わせられないような距離になっている。

「陽平はいいとしてもみんな受験勉強は？」

沙織はどここの高校を受験するのだろうか。K高校ならこの先三年

間毎日のように彼女の顔を見ることができるとはいいのだが。

「さあね。遊びにこれるくらいなんだから大丈夫なんだろ」

少し自分本位で他人のことに気が回らないところがある陽平らしい物言いだ。しかしそんな言い草も妙に納得してしまう。

陽平は常に自信に満ち溢れていて、しかもそれが嫌みではない。彼の周りにはいつも人がいる。彼の魅力は太陽のように人に求められ人を照らしている。

「光太郎もたまには息抜きした方がいいぞ。どうせお前ならK高校だって楽勝だろ」

僕が周りにひけをとらないことと言えば勉強だけだ。中学に入ってからテストで学年のトップテンを逃したことはない。K高校は公立では一番の進学校だが校内三十位程度に入っていればまず大丈夫と言われている。

「どうする？」

「カラオケかあ」母さんが目を覚ますまでにはまだ時間はある。しかし、僕はカラオケが得意ではない。自分の声がマイクを通して部屋中に響き渡っている状況にどうにもなじめないし、誰かが得意げに歌う曲にあわせて身体を揺らしてリズムを取るのも苦手だった。女子がいるならなおさら緊張して上手にできないだろう。あまり楽しそうないメージは思い描けない。「俺は、やめとくわ」

「今日も、病院か？」

「まあ、そんなとこ」

僕は軽く眉を顰めて見せた。

気が乗らないときはいつもこの手で逃げている。嘘ではないが、100%頷くこともできない。

「あ、いた。仁科君」

僕の顔を見つけて小走りに寄ってくる坂本先生が陽平の肩越しに見える。僕に何の用だろうか。

「じゃあ、また今度な」

陽平はあっさり引き下がった。

僕みたいなパツとしない人間にも声を掛ける優しさや、誘いを断られても軽く受け入れてくれる淡泊さも彼の魅力の一つだと言えるだろう。

「おう」

坂本先生と正反対に走り去っていく陽平に手を挙げて僕は坂本先生を待った。

坂本先生はおそらく150センチメートルもないだろう。決して背の高い方ではない僕とでも向かい合うとかなり見上げる格好になる。

「仁科君。来週の実力テストが終わったら父兄の方と進路について面談することになってるんだけど、仁科君の場合、お父さんになるよね」

坂本先生も当然母さんが入院していることを知っている。

「そうですね」

「仁科君のお父さん時間作れそう？もしお忙しいのならお父さんの都合の良い時間に家庭訪問させてもらってもいいんだけど」

僕の父は県立博物館に勤務している学芸員だ。

去年のこの時期に県内の工場跡地から古い陶器の欠片が見つかり、それが室町時代のものだということが判明して以来、父は急に多忙になった。学生時代に大学院まで進学して考古学を専攻していた父は当然のように発掘チームにしかもリーダーとして組み込まれてしまった。博物館の仕事はそっこのけで発掘現場に派遣されることになったのだ。

日本史の教員である坂本先生もそのことを知っているのだろう。

「父の予定はちよつと僕にも分からないんです」

発掘が始まってからは毎日早朝に家を出て夜遅くに帰ってくる父とは会話をする機会が少なく、この生活リズムがいつまで続くのか全く読めない。発掘のことはよく分からないが、実際携わっている父でさえも見通しが立たないような状況なのではないかと想像している。

「そうよね。発掘だもんね」

坂本先生の声にはどこか羨ましが滲んでいるように聞こえた。日本史を生徒に教えるような人にとって父の仕事は興味深く羨望の的なのかもしれない。

「どうするか聞いてみます」

「うん。時間の調整が必要だからお父さんから学校に電話してもらえると助かるかな。お願いね」

坂本先生と別れて下駄箱に向かう。

これからどうしようか。今から病院に向かっても一時間は母さんは起きないだろう。でも学校にいる理由もない。

下駄箱の向こうから差し込んでいる西日と言つには強すぎる陽光に目が眩む。肌を焦がすような暑さがそこにある。今、外に出るのは得策ではない気がした。図書室で涼みながら勉強でもしようか。

「おい、光太郎」

デジャブのようだが陽平が呼んだのではない。聞き覚えのない女性の声だったからだ。

女子にこんな風に馴れ馴れしく下の名前で呼ばれたことはない。

僕はどぎまぎしながら後ろを振り返った。

そこにはあの転校生が仁王立ちしていた。ホームルームのときの見下ろすような冷やかな視線を長い前髪の間から無遠慮に容赦なく僕に浴びせてくる。

僕は首を竦めるような気持ちでおずおずと佐伯と向かい合った。

「呼んだ？」僕の問いに彼女は小さく顎を引いた。僕は彼女の意図を探るため前髪の間から隠れている瞳に目を凝らした。「何？」

少し声が上がってしまう。

彼女が僕に何の用だというのだろう。彼女とは今日会ったばかりで、もちろん話すのはこれが初めてなのにどうしてこんなにも気安く呼び捨てにされるのだろうか。

女子と話す緊張よりも、展開が読めない不安が先に立つ。

「光太郎ってさ、美術部でしょ？」

彼女は僕の目の前に立ち長い髪を指先で掬い耳に掛けた。黒髪の奥から露わになった少し尖った耳の形と白さが僕の目に焼きついた。うなじに浮かんでいる柔らかさそうな産毛の存在に見てはいけないものを盗み見たような後ろめたさを感じてしまふ。僕は思わず視線を床に落とした。

「なんでしょ？」

確認する彼女の声に軽い苛立ちが漂う。

叱られたような気持ちでハッと顔を起こすと僕の目を覗き込むような彼女の力のある眼差しとぶつかった。

「そうだけど」

多少否定したい気持ちを抱えながら僕は頷いた。

確かに僕は美術部に在籍していたがそれは「仕方なく」であり形だけのものだった。

この中学校は部活動を重んじていて生徒は何かしらの部に在籍すべしという校則がある。それで「仕方なく」美術部に入部したのだが、その選択に当たっては母さんの見舞いという事情を考慮したわけではない。

運動が苦手。ブラスバンドのように華やかなイメージがつかまとうのも苦手。囲碁将棋はルールが分からない。結果、消去法の末に残ったのが一人で黙々と作業ができる美術部だったというだけだ。

しかも美術に特筆すべき思い入れがあるわけでもない僕にとって美術部は帰宅部。最低限の活動には参加したが本気モードの部員からしてみれば爪弾きにした存在の幽霊部員だっただろう。「だった」と過去形なのは一学期の終わりに引退作品を完成させて三年生は全員引退したからだ。そういう意味でも僕は佐伯の問いに首を横に振りたかったのだが、それを口にしたら、つまらない屁理屈をこねるな、と怒られそうなのでやめておいた。

「良かった」

佐伯が小さく笑ったのを見て、僕は少なからず驚いた。彼女の顔は眉一本動かない鉄仮面ではなかった。彼女がこつこつ簡単に笑顔を

見せるとは。僕はこの掴みどころのない転校生が急に近い存在になったように思えた。

「どうして俺が美術部って」

「さつき、さかもつちゃんに聞いたのよ。この学年に美術部員いませんかって。そしたら確か仁科君がそうよって」

「そ、そうなんだ」

転入初日からいきなり担任教師を「さかもつちゃん」呼ばわりとは。やはりこの御仁は何を考えているのか分からない。

「ねえ。あたし、美術部に入りたいの。どうしたらいい？」

「え？今から入りたいの？」

「入れないの？美術部は転校生入部お断り？」

「そういうことはないと思うけど。三年生はもう引退したんだよ」「絵を描くのに引退なんかない」

そういう問題ではないと思うけど。しかし、胸を張って言われると僕は反論できなかった。

「梶田先生に相談すればいいんじゃないかな」

僕は逃げるように美術の教師で部の顧問の名前を挙げた。

ただ、この顧問は僕に輪を掛けて幽霊的存在で僕が在籍している間に部員の指導に現れたことは一度もなく、絵筆を持った姿すら見たことがない。自分が美術部顧問であるということを確認しているかどうかさえ甚だ疑わしいような教師だ。だからこそ三年生の佐伯がこの時期に入部したいと言い出しても軽く「ご自由に」と言いそうな気はするが。

「カジカジはどこにいるの？」

「えっと」僕はカジカジが梶田先生を指しているのだと思い至るまでに少し時間がかかった。彼女は誰にでもあだ名をつけないと気が済まないのだろうか。「職員室かな。でなかったら美術室の準備室か。目がチカチカするようなワイシャツ着てるからすぐに分かるよ」

梶田先生の色遣いのセンスは、さすが美術教師、凡人には理解できない、と校内で評判だ。どこで売っているのか見当もつかない光

沢のあるテロテロの生地に原色をちりばめた柄は遠目で見ても梶田先生だとすぐに分かる。

「連れてって」

「え？」

「職員室も美術室も場所分らない」

僕は気がひけた。

職員室は生徒なら誰しも足を踏み入れたくないところだし、美術室に行つて後輩の邪魔をするのも嫌だった。引退した先輩幽霊部員の顔など誰も覚えていないだろうがこちらとしてもどんな顔をして入つて行けば良いのか分らない。

何とか彼女から逃れる術はないだろうか。僕の心はすでに後ずさりしている。隙あらば駆けだす算段だ。

「職員室はすぐそこだし、美術室はこの校舎の3階・・・」

「カジカジの顔も分らない」

眉間を曇らせて目を細めた彼女の不機嫌そうな言葉に囚われて僕は鬼軍曹に命令された一兵卒として背筋をピシッと伸ばし先に立つて歩き出した。

味噌汁を椀につけながら僕は父の様子を盗み見た。

仕事からの帰りしなに近くのスーパーで買ってきたというアジフライを皿に載せ電子レンジで温めている父。その背中は最近少し小さくなった気がする。

首筋や手の甲の肌は赤茶けていてまるで古いレンガのようだ。見るからにカサカサとしていて張りや潤いというものが全く感じられない。少し力を加えればぼろぼろと崩れてしまいそうだ。汗を出すとか温度を感じるとかいった皮膚としての機能は恐ろしく低下しているに違いない。ろくに手入れをせずにこの夏の強烈な日差しを毎日浴び続けた結果がこれなのだ。汗と土埃が複雑に絡み合ったような餿えた加齢臭を周囲に振り撒いていることに父は気付いているのだろうか。

普段は学芸員として特別なイベントがあるとき以外は残業などほとんどなく週休二日をしつかり守っていたのだが、発掘が始まって以来父は早朝に家を出て夜遅くまで帰ってこず、しかもほとんど毎日出ずっぱりだ。

チーム編成が発表される前からテレビや新聞で例の陶器のことが取り上げられると食い入るように見つめていた父が発掘に直接携われることを喜ばないはずがなかった。「戦国時代の武家屋敷跡だろう。この地域ではこういう発見がなかったから当時の生活様式を知る上で貴重な資料が出土するかもしれない。町のPRにはもってこいだ」と熱い口調で僕に説明していた父は母が入院して以来一番生き生きとした表情を見せていた。

あれからもう一年が過ぎている。

発掘の進捗状況はどうなのだろうか。果々しいとは言えないということは久しぶりに夕食に間に合うように帰ってきて疲れ気味に肩が落ちている父の様子を見れば僕には分かる気がした。

「明日は久しぶりに休みだから俺が朝起きてこなくても心配するなよ」

テーブルについた父は味噌汁を啜りながら僕の顔を見ることなく言った。

父の声は何となく僕の耳になじみがない感じがした。そういえばこの一年間父子の会話はほとんどなかったのだと思いつた。

僕が起きる頃にはすでに家を出ているのだから朝父の顔を見ないのは明日も今日までと変わらないという思いを込めて僕は曖昧に頷いた。

「これからは今までみたいな忙しさはないから」

「了解」

取りあえずそう返事をしたが、父の言いたいことが何なのか僕にはよく分からなかった。

朝起きたら父が優雅に朝ごはんを作っていることがあるかもしれないということか。週休二日が確保されるということか。入院している母に面会する時間は取れるのか。

生温かいアジフライを食べながら待っていても父からは何一つ情報は何も得られなかった。

取りあえず発掘調査は一区切りついたということなのだろう。今後発掘チームがどういうことになるのか、いつになったら普段の暮らしに戻るのかは父にもまだ分かっていないのかもしれない。

「来週、実力テストがあるんだ」

「そうか」

「結果が出たら先生と進路についての面談があるんだって。先生が日程調整したいから電話が欲しいって」

「誰に？」

「父さんに」

「俺に？進路面談？・・・そう言えばお前受験生だったな」父は急に食欲をなくしたように手にしていた茶碗と箸をテーブルの上に置いた。「すまなかったな。こここのところ家のことはお前に任せっぱ

なしだった」

まるで古女房に言うような謝罪の言葉が返ってくると僕は気恥しくて慌てた。

「母さんのこともね」

しまったと思ったときには既に遅かった。非難めいたことを口にするつもりはなかったのに。

父は僕の前でいよいよ恐妻家のように畏まって頂垂れた。

「母さんにも悪いと思ってる」

父は突然茶碗に残ったご飯に味噌汁を掛け勢い良くかきこむと自分が使った食器を流しで洗い、僕がどこの高校を志望しているかを訊くこともなくそそくさと風呂に向かった。

実力テストの出来は可もなく不可もなくといったところだった。学年の順位は9位で辛うじてトップテンを守ったにとどまった。

夏休みに塾の夏期講習にも通いそれなりに頑張つて勉強したつもりだったから結果を見たときには期待外れの印象だった。しかし、思い返してみれば夏の暑さに負け何となくだらけて取組んでいたよくな気もする。僕だけに夏休みがあつたわけではなくみんなも努力しているのだからそんなに簡単に順位が上がるはずもない。

それでもこの調子でいけばK高校にはまず間違いなく合格できる。そう考えれば少し気持ちも楽になった。

僕は軽く両膝を叩いて立ち上がった。寝入つた母さんを起こさなように「また明日」と小さく声をかけ静かに病室のドアを開く。

病院の外は空に膜を張つたような思いがけない薄暗さだった。来たときは空調の利いた病院に入つてもしばらく汗がひかないほど暑かつたのだが、今は僕の頬をひんやりとした空気が撫でていく。

見上げると南の空を煤が立ち込めたような不気味な雲が覆っていた。しかも止めようのないドミノ倒しのようなスピードでその面積は刻一刻と広がりを見せている。

夕立が来る。傘はない。

僕は慌てて自転車にまたがった。

院内に戻つてしばらく様子を見ようか。

一瞬躊躇したが、夕飯の準備を考えるとそうもいかない。耳をすませば大粒の雨が地面を叩きつける音が聞こえてきそう。背後から迫る雲の流れから逃げるようにペダルを踏みだした。

道路上に人影はまばらだった。誰もが雷様の登場を予想して家中でおへそを隠してじっとしているのだろう。

僕は家路を自転車レースのコースに見立て空いた道をタイヤを唸らせて全速力で駆け抜けた。

顔に冷たいものを感じた。途端に夏の名残りの日差しに焼けたアスファルトが濡れて湿った土臭いにおいが立ち上りはじめる。

あと少して家なのに。

しかし、手の甲や頬、首筋に空から降ってくる幾筋もの重い水滴が容赦なくぶつかって弾けていく。

あつという間に雨の幕に包まれてしまった僕は路肩に駐車している軽自動車进行を何とか避け全速力でマンションの敷地内に駆け込み自転車置き場の壁にぶつけるように自転車を突っ込んだ。

頭上に鞆をかざしながら建物に逃げ込んだときには手で払っても焼け石に水というぐらいに服が濡れてしまっていた。ズボンからハンカチを取り出して顔を拭おうかと思っただが面倒になって階段を駆け上がった。

ドアに鍵を差し込んで違和感を覚える。

鍵を開けなくてもノブを回すとドアは簡単に開いた。

中を覗くと父親の革靴の隣に見慣れない女性もののパンプスが並んでいる。

「雨に降られちゃったでしょー」

僕は廊下の奥からスリッパを鳴らして駆け寄ってくる人に目を凝らした。

母さん。

母さんが僕の手にはタオルを握らせる。そして自分でもタオルを使って僕の頭や肩を拭ってくれる。

不意に目頭が熱くなって視界が霞む。髪から伝う雫が目に入りぼやけて見えるのか。

僕は洗剤の匂いがするタオルに顔を押し付けた。

「早く着替えてこい。風邪ひくぞ」

顔を起こすとワイシャツにスラックスという最近あまり見ることのなかったこざっぱりした格好の父が立っていた。その横にいるのは……坂本先生だ。

「先生」

僕はどうして坂本先生を母さんに見間違えたのだろう。病院にいる母さんが家でこんな風に出迎えてくれるはずなのに。

「今日はたまたま仕事の都合がついたから先生に家庭訪問に来ていただいたんだ」

父の言葉はどこか言い訳がましく聞こえた。

時間ができたのならまず何をしておいても母さんの見舞いに行くべきじゃないか。そう言いたくなかったが、僕の進路面談のために時間を割いてくれたのだからと思うと頷くしかなかった。

坂本先生はリビングに入っていたかと思うと鞆を手に戻ってきた。

「では、私はそろそろ失礼いたします」

「あ、ああ。そうですね。今日はご足労いただきましてありがとうございます。ございました」

父と坂本先生が話しているのを見るのはどこか不思議な感じがした。

当然ながら二人とも僕はよく知っているが、父は家の中、坂本先生は学校でしか存在せず登場がシンクロナイズすることはなかった。それが今、僕の目の前で二人が会話している現実にくまなく僕がフィットできていないようだ。

「いえ、とんでもございません。私の方こそ忙しいのに貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます」

「よろしければ、発掘現場の方へもお越しください。案内させていただきますので」

「ありがとうございます。ぜひ、よろしく願います」

頭を下げ合う二人の大人。僕はタオルを使いながら部外者の感覚でそれを眺める。

社交辞令の応酬。空虚な芝居臭さ。「そろそろ時間だから帰るね」「じゃあな」で終わることにどれだけ時間をかけるのか。大人になれば僕もこんな風に口先だけの言葉のやり取りのスキルが身につくのだろうか。

「雨、降ってますけど」

僕も大人のやり取りにそろりと顔を出した。言ったらまた一しきり芝居続行となるのは分っていたけど、ずぶ濡れで突っ立っているのに指摘しないのもおかしいかなと思って。

「あ、そうだった。先生、雨が止むまでもう少しゆっくりしていかれたら」

「お気遣いありがとうございます。でも今日は車で来ておりますので大丈夫です。まだ仕事も残っておりますし」

「そうですか。それではお気をつけてお帰りください」

にじるようなゆっくりとした動き。二人が息を合わせて玄関に近づいていく様は見事だった。

ドアが閉まるまでいったい何度お辞儀をし合っただろう。大人って面倒くさい。

僕は髪から滴る水の流れをタオルで拭いながらリビングに入った。いつもと違う匂いがあった。坂本先生の残り香だ。

学校ですれ違う時には何も思わないのに、ここで嗅ぐと何となく大人の女の艶めかしさが感じられるようで僕は慌てて自分の部屋に逃げ込んだ。

休日の昼間に父親が家にいる。

それは当たり前のことのようでもあるが、その現実に対して何となく構えている自分がいる。

発掘に駆り出される前の状態に戻っただけなのに、どこか自然に振舞えないのは何故だろう。

慣れの問題だけなのだろうか。家族と言えど一年のブランクというのは一足飛びには埋めることができない時間ということなのかもしれない。

「このグループ、人気があるのか？」

昼ご飯に僕が作った焼きそばを頬張りつつテレビに視線を送りながら父が訊ねてくる。

映っているのは僕とそんなに年齢の変わらない女の子十人で構成されている最近売れ出したアイドルグループだ。どの子も激戦のオーディションを潜り抜けた自信とプライドが窺い知れる磨き上げられた笑顔を振りまき飛び跳ねながら歌っていた。僕は彼女たちの名前と顔が一致しないのだが、クラスの中では「あの中で誰が一番可愛いと思う？」「そうだなあ、俺はやっぱり……」という会話が頻繁になされている。

それにしても以前の父はこんな実のないことを僕に訊いたのだろうか。

そして一年前の僕は父に返答することがこんなにも面倒臭いと思っただろうか。

「知らない」

自分でも驚くほど乾いた返事。口にしてみると一年前まではこんな口のきき方をしたことはなかったということがはつきり理解できる。

向かい合っている父も驚いたのかテレビから僕の顔に視線を移し

てきたのが目の端で分かった。僕はキュツと胃が窄まるような感覚を覚えながらその視線を無視して焼きそばを噛み潰し続けた。

やはり何かが違う。

この一年間で僕の内面が反抗的で自立的な成長を遂げたのか、それとも子供の親離れに父の気持ち追いつかないのか。とにかくくしくしくした余所余所しい会話と、外のうだるような暑さとは裏腹の肌寒く重い空気はどうにも居心地が悪かった。

そのとき家の電話が鳴った。

固定電話に掛かってくるとすれば父の仕事の関係か、そうでなければ化粧品や教材の押し売り勧誘だ。どちらにせよ僕には関係ない。それでもこれまでの習性で出ようかと思っただが僕が箸を置くと父がお茶でのどを通し、僕を手で制して立ち上がった、

僕は受話器を上げる父の背中を見ながら静かにだが大量に肺の奥から空気を吐き出した。

どうにも息が詰まる。

発掘が新たな展開になったから今から来てくれ、という内容の電話ならいいな。そうでなかったら図書館に行つてくるとでも言い繕つて外に出よう。受験生には勉強という大義名分がある。

しかし、父は「ちよつと待ってね」と軽い口調で相手に告げ、あっさり保留ボタンを押して意味ありげに口元を歪めて僕を振り返つた。

「光太郎、お前にだぞ。女の子から」

一瞬にして顔から火が出た。焙られたように顔が熱い。

女の子から電話が掛かってくるなんて人生初だ。

誰だろう。どんな用件だろう。

しかし、携帯にはなく固定電話にというのが良く分からない。今度はなおさら父の目を見ることができず俯き加減で電話の前まで行く。

コードレスの受話器を取り、上ずる声で対応すると相手は西堀と名乗った。全くピンとこない。

「西堀さん？えつと……」

「この夏から美術部の部長をやらせてもらってます」

ということばは二年生か。

真面目に美術室に出入りしていれば文化部と言えど同じ部内だから違う学年でも交流はあるのだが、熱心とは程遠かった僕は同学年の部員ですら大した会話をした記憶がない。見れば思い出すかもしれないが西堀という名前と声だけでは彼女のことは何の印象も浮かんでこなかった。

うちの電話番号はおおかた部員名簿で探したのだろう。それにしても部長さんが引退した幽霊部員の僕なんかはどうして電話を掛けてくるのか。

僕の背後で父が焼きそばを啜る音がする。僕は子機を耳にあてたままりビングを出た。

「俺に何か用？」

「すみません、突然お電話なんかしちゃって。少し伺いたいことがあったんですけど、でも学校で三年生の階に行くのってかなり勇気が必要で」

それは理解できる。

中学生にとって一歳の差は絶対的なもので、違う学年の領域に乗り込むのは敵地に足を踏み入れるような感覚になる。降り注がれる視線は鋭く冷たい。その疎外感たるやまさに針のむしろだ。

「そりゃそうだね」

「はい。それで、あの……」

彼女が黙ってしまったって妙な間ができあがり僕を動揺させる。だからと言って沈黙の理由が分からなければ掛ける言葉も見当たらない。彼女がわざわざ電話をしてきたのは何のためだろう。

僕は自室に入り後ろ手で静かにドアを閉めた。

僕に告白？まさか。

しかし、一旦辿りついてしまったその思考に僕の心は勝手に高揚した。高鳴り出した胸のドキドキが受話器越しに聞こえてしまっ

いないだろうか。

好きです、先輩。

そんなこと言われたらどうしよう。西堀、西堀……。かわいい子かな。

いくら不真面目だったとは言え全く参加していなかったわけではないのだから美術室内で顔を合わすことはあつたはずだが……。大所帯でもないのにやはり何も思い出せない。

今日の電話での受け答えだけ取ってみれば丁寧な口調から悪い印象は全くない。とりあえず会ってみて…。

「佐伯さんって知ってますか？」

「佐伯？」やつぱり僕に告白ではなかったようだ。背骨を抜かれたように力が抜けて僕はベッドに転がり込んだ。仰向けに寝そべると投げやりな声が出てしまう。「同じクラスだから、そりゃ知ってるけど」

そう言えば佐伯とは梶田先生を探しに美術準備室に同行したとき以来ろくに話はしていない。その後どうしているのだろう。

美術室を使わせてもらいたいと願い出て、梶田先生も案の定二つ返事であつさり許可していたが。美術部の部長から佐伯の名前が出てくるということは本当に部活に参加しているということなのだろうか。

「どつという人ですか？」

「どついうつて言われてもなあ」

彼女が転校してきてからまだ半月ほどしか経っておらず、彼女について何かを語るほどの知識は全くない。強いて言えば何を考えているか分からなくて怖いということなのだが、そんなマイナスイメージは伝えづらい。

「会話されたことありますか？」

「少しだけ」

「普通ですか？」

ものすごく曖昧な問いかけにどう答えたものかと逡巡する。

佐伯との数少ないやり取りを思い出してみると僕の中での普通の定義からはかなりはみ出しているような気がするが。

「普段は無口で外見は少しとっつきにくい感じはするけど、話せば結構フランクだよ」

モノは言いようだ。受験生にもなるところという言い回しができるようになる。

「そうなんですか。良かった」受話器の向こうから、少し安心したという感情が伝わってきて、逆に僕は若干不安になった。「佐伯さんって見た目的に怖そうな感じがしたんで、ちよつとほつとしました」

やっぱり。

僕の雅な表現の仕方では彼女のサディスティックで強引な性格を包み込んだオブラートがちよつと厚すぎたようだ。

「何かあったの？」

「あのですね……」言いくそうに口ごもる。「最近ちよちよこ放課後に佐伯さんが美術室に現れるんです。それで二時間ほど絵を描いていかれるんですけど、その、ちよつと……」

「ちよつと、どうしたの？」

「私は別にいいと思うんですけど部のイーゼルを使ってらっしゃるんです。あと準備室に置いてある部員の画材を勝手に使ったりも。

挨拶して無視されたって言う子もいます。それで部員から、部長なんだから一言言ってくれて言われて正直困っちゃって……」

「なるほど」

僕は思わず唸った。さもありません。

佐伯は周囲の気持ちを忖度するという面が欠けているように思う。きつと彼女にも他の生徒をないがしろにするつもりはないのだろうか。けれど。

「こんなこと言ったらなんですけど美術部の部長って運動部の部長と比べると形だけのもので大した役割ないじゃないですか。やることって言ったら部費と美術準備室の鍵の管理ぐらいで。だから軽い

気持ちで引き受けたんですよ。これで内申点が上がるのならラッキーかもみたいな感じだったんです。だから部長になって早々にこんな事件が起きるなんて思ってもみなくて。だから私……」

僕は受話器を耳から少し離れた。

西堀は喋り好きなのだろう。僕はまだ打ち解けたつもりはないのにベテランの講師のように息つくことなくどんどん言葉を浴びせてくる彼女の声が少し耳にうるさくなってきた。だからと言って無下に電話を切ることもできない。

僕はベッドから身を起こした。

事件という表現はちよつと大げさな気もするが、彼女の我が身の不運を嘆く気持ちは理解できる。相手があのお佐伯でさえなければ彼女にとつても「事件」とまではならなかったのかもしれない。

僕だつてクラスメイトでありながら佐伯に話しかけるのは勇気が要ることでできれば避けて通りたい。僕が西堀の立場だつたらと考えると背中が寒くなるようだった。

それに女の子と電話をする機会なんて初めてのことで、異性とコンタクトに免疫がない僕にとつてはこれは非常に貴重な経験であることは間違いない。しかももし西堀がそれなりのルックスだったとしたらここで彼女と仲良くなつておくことは僕に残された中学生生活において損であるはずはない。

お喋りは女性共通の特性なのかもしれない。少しぐらい耳がキンキンしたつてここはひとつ先輩として彼女の悩みを真剣に受け止めてあげよう。

「……そうしたら仁科が何とかしてくれるつて」

「は？俺が何だつて？」

彼女の話に注意を戻した途端に僕の名前が出てきて僕は思わず声を出していた。

「もう。先輩、私の話聞いてくれましたか？」

「もちろん聞いてたけどいきなり名前を呼ばれたからちよつとびっくりしちゃつて。ハハハ……。で、どうして俺が出てきたんだっけ

？」

「いきなりじゃないですよ。ですから、困って梶田先生に相談してみたんです。いくら幽霊とは言え一応美術部の顧問なので。そうしたら梶田先生が一言、佐伯を美術部に勧誘したのは仁科だから仁科が何とかしてくれる、って。だから今日先輩に電話してるんです。お願いします。何とかしてください」

「ちょ、ちょっと待って。俺は別に佐伯を勧誘なんかしてないって。それは間違いない。佐伯に脅されて梶田先生の所まで案内させられただけだ。」

「でも、先生は先輩が佐伯さんを連れてきたって言うてましたよ」

「それはそうだけど」

「こんなこと言ったら失礼かもしれないですけど、美術部OBとして勧誘なさった以上先輩にも責任があると思うんです」

電話なのに実際に目の前で西堀から詰め寄られているような圧迫感を受ける。僕はその、後には退けないという部長の使命感ような気迫にたじろいでいた。

責任ねえ。

思いがけず後輩から突き上げを食らい突然中学生にはなじみのない言葉が僕の心に重くのしかかってきた。僕は生れて初めて他人のことに対して責任を果たさなくてはいけなくなってしまうたようだった。

車の中で父がカーステレオに合わせてお気に入りの懐メロを口ずさんでいる。

父の横でこれまでも何度となく聞いてきたその退屈なメロディーが今日の僕にはどうにも耳触りで仕方がない。歌のテンポがいけないのか、父のお世辞にも上手いとは言えない唄声が気に食わないのか。先ほどの西堀からの電話でブルーになっていた僕はとにかくイライラしていた。

息がつまりそうだがクーラーを掛けているから窓を開けるわけにもいかない。当てどなく窓の外に目をやりながら花屋で買ったバラの花束を握る手に力を込める。

漸く駐車場に到着する。父より先に車から降りると僕は深く息を吐き出しのっそり出てきた父の前に立って歩いた。先導するためではない。父の顔を見なくて済むからだ。

毎日のように通っている病室までの階段や廊下も父と一緒に何かが違う。親と歩くのが気恥しい感じがしてどうしても足早になってしまう。しかし、父は僕の気持ちも知らずにゆっくりと歩く。何となく足取りが重いように見えるのは単に僕の気が急いているからだろうか。

ノックして病室に入ると母さんはベッドにちょこんと座っていた。膝の上に置いていた雑誌を仕舞いこちらを見て小さく口角を上げて微笑む。

「いらつしゃい」

母さんの所作や声がどことなくぎこちなく他人行儀に見える。何故だろう。いくら夫婦でも久しぶりに会うと肩肘張ってしまうものなのだろうか。

「調子はどうだ？」

父がお決まりの言葉を口にする。

「うん、ぼちぼち。それにしてもすごい日焼けねえ。まっくる」

「そうか？それでも最近は現場に出ることが減ってましになったんだけど」

「少しは休めるようになったの？」

「ああ。だから今日はこうやってここに来れた」

「そうね。ありがとっございます」

「いや、別にそんな・・・」

先ほどから両親は目を合わせようとしない。会話も上辺だけでまるで用意された台本をなぞっているようだ。しかし、そのやりとりがどちらかだけ空回りするということがないのはさすがに何年も連れ添った間柄のなせる業と感心する。

それにしても明らかに余所余所しい空気は二人の子供という立場の僕には少々いたたまれない。

「座ったら？」

母さんがベッドの横を指さす。

「あ？ああ」

父は初めてそこにパイプ椅子があるのを知ったかのような顔つきで母さんの横に腰を下ろす。しかし夫婦の間には会話が生まれない。僕がいるから水入らずとまらないのだろうか。

「活けてくる」

僕が花束を持った右手を軽く上げて枕もとのガラスの花瓶を掴むと慌てたように父がサッと立ち上がる。

「俺が行ってこようか」

「そんなのいいよ。いつもやってるし。座ってて」

「そうか」

父が所在なさそうに再び腰を下ろす。

「き、きれいなお花ね」

「あ、ああ。最近はバラの色も種類が多くなってるんだな」

いったいどうしたのだらう。前からこんな感じだったっけ。僕は病室から出るときに一向に打ち解けない様子の両親を見やって小首

をかしげた。

部屋に戻ると、とうとう二人は黙ってそれぞれ自分の手を見下ろしていた。今さら自分の指の形や甲に浮き出ている血管に興味なんかないだろうに。

「昨日は夕立が降ってきて大変だったよ。びしょ濡れになっちゃって」

どうして僕が気を遣って話題を提供しなくちゃいけないんだ。それともこれは余計なおせっかいなのだろうか。

「そうそう。眠る前にすごく雲行きが怪しくなってたから心配だったのよ。やっぱり降ってきたのね。自転車で帰ったの？滑って転んだりしなかった？」

母さんが少し眉間を曇らせて僕を見上げた。

「道路は空いてたから逆に安全だったよ。問題なし」

「そう言えば、昨日光太郎の担任の先生が家庭訪問に来たんだ。今の成績ならK高校は大丈夫だとさ。実力テストの結果は文系科目が少し物足りないって言ってたけど」父が威めしい顔つきで僕を見る。「苦手なのか？俺が教えてやろうか」

急に饒舌になった父が鼻を膨らませる。

学芸員になるぐらいだから父はきつと文系科目に自信を持っているのだろう。留学経験もあるらしいから英語だってそこそこ喋ることができるとはではないか。

「たまたま調子が悪かっただけだよ」

本当は毎回国語や英語の点数が低迷していて足を引っ張っているのだが父に教わるのだけは避けたい僕は逃げを打った。

しかし、今後高校に行つて理系を選択したとしても英語は重要科目だから何とかしなくてはならない。今までは何となく毛嫌いしていて勉強に身が入らない英文法だったが、父がしゃしゃり出てくる前に今日からは気合を入れて取り組むことにしよう。

「担任の先生って坂本っていう女性の方だったかしら？」

坂本先生の話をしたことあつたっけ。母さんが覚えているという

ことは母さんとの会話の中で軽く登場したのだろう。相変わらず母さんの記憶力の良さには舌を巻く。

「そうそう、その坂本先生が転入生のこと言ってたな。光太郎が美術部でその子も美術部に入りたくて光太郎が優しく相談にのってくれたから助かったとかつて。お前、美術部だったんだな」

僕は暗澹たる気分になった。誰がいつ優しく相談にのって佐伯を助けたつて？

「あら、そう。その子って女の子？」

母さんが今日初めて母さんらしい柔らかい表情を見せる。僕の顔に浮かぶ表情の変化を見逃すまいと目を大きく見開いて。

「そう言えばさっき女の子から電話があつたよな。西堀とか言ってたけどその子か？」

父がいたずら好きの子供のように僕に訊ねるふりで母さんに告げ口をする。

ああ、面倒なことになってきた。母さんは頬を光らせてさらに強く僕に詰め寄る。

「え、そうなの？光太郎に女の子から電話なんて今までもあつたの？」

「俺は知らないな。おい、どうなんだ？」

ようやく夫婦らしいがっちり噛み合つた連携を見せて一人息子からかう両親の前に僕は羞恥心で顔が熱くなるのを止められない。何でも良いからとにかく否定しないと。

「そんな電話ないよ。今日のも部活の事務連絡。西堀は一つ年下で今年から部長やつてる子なの」

強い口調で説明しても二人はにたと笑うだけだった。

「お前、部活つて三年の夏なんだからもう引退したんじゃないの？」

「引退したのに掛かってくるなんて、何かあつたの？」

僕はぐっと思を詰まらせた。先ほどまではぎくしゃくしていたのに二人のこの息の合いようは何なんだ。

「その転入生の件だよ。三年なのに今頃に入部してきたからどう扱っていいのか分からないみたいで」

「ふーん。で、その転入生は女の子？」

ここで本当のことを言ったら事態の收拾は覚束ない。「名前は何ていうの?」「外見はどんな感じ?」などとさらなる質問攻めが繰り返されるのは火を見るより明らかだ。

「男だよ、男」

僕はシッシと追い払うように断言した。言ってから父は坂本先生から佐伯が女子であることを聞かされているかもしれない思ったが、知っているなら既に母さんに教えているはずだと僕は心の中でその可能性を否定した。

「本当にい?」

母さんは楽しくてたまらないという感じで聞き分けのない幼児のように執拗に食い下がってくる。

「本当だよ」

言い捨てる僕と僕は母さんに背を向けて備え付けの冷蔵庫から麦茶を取り出しグラスに注いで一気に飲み下した。

授業が終わり気だるそうに鞆をぶら下げて教室を出ていく佐伯の背中をこっそりと僕は追った。

長い髪を軽く揺らして廊下の中央を闊歩する佐伯。まるでモデルが花道を歩くように堂々と一定のスピードを保って突き進む。彼女の前に立つのを怖れるかのように同学年の生徒たちが次々と脇に寄っていく。

彼女の人を寄せ付けないオーラは後姿を見ているだけでもビリビリと伝わってくる。僕の足取りは一步一步重量感を増していった。

あの佐伯に話しかけて部活動の何たるかや集団行動でのマナーを説かなくてはならないのか。

僕は身の丈に合わないひどく大それたことをしようとしている気分だった。卒業式で訓話する校長のマイクを奪い全校生徒の前で漫談をやるだとか職員室に単身乗り込んで梶田先生に「その服どこで売ってていくらで買ったんですか？」と笑いながら訊ねることの方がまだ簡単に違いない。果たして僕にそんな胆力と能力が備わっているのだろうか。

彼女に声を掛けるタイミングを計るところか見失わないようについていくだけで息が切れてくる感がある。そんな僕にはこの距離を詰めて彼女の肩を叩きこちらへ振り向かせることなど沙織とデートすることより不可能なことのように思える。

彼女は迷いのない足取りで階段を上がっていく。

この棟の三階には美術室がある。彼女は今日もそこでキャンバスに対面するつもりなのだろう。

一段一段上るたびに張り弛緩を繰り返す彼女のふくらはぎの肉感的な動きは父が日曜に見ていた競馬中継のサラブレッドの四肢を彷彿とさせる。膝裏の青みがかかった血管が透けて見えるような白さはいやに扇情的だ。

フェチという言葉を目にすることがあるが僕は自分が女性のその部分にフェティシズムを覚えるのかもしれないと思いつつ何となく自己嫌悪を覚えた。性的興奮を肯定的に捉えられない心理は僕がまだ子供だということなのだろう。

そんなことをぼんやり考えているうちに彼女はさつさと階上に消え姿が見えなくなってしまうた。僕は慌てて彼女を追いかけた。

階段を上り切り美術室の方へ廊下を右に曲がったところで僕は真横から声を掛けられた。

「何か用？」

ひっ。

僕は声にならない声とともに飛び上がって驚いた。その拍子に彼女がもたれているのとは反対側の壁にしたたかに肩をぶつけて思わずうずくまる。

小さく呻きながら痛みの中で僕は自分の腹が据わるのを感じていた。彼女は僕が後を追っていることに気づいていたようだ。この状況を取り繕う言い訳など何も見当たらない。この場を逃せば西堀に求められたことを達成することはもう無理だろう。とりあえず動揺している心臓の動きを勢いに変えて一気に彼女と対峙してしまおう。僕は鈍痛の残る左肩を抑えながら彼女の眼前に立ち上がった。

「あのさ・・・」

僕が腹を据えて口を開くと佐伯は冷ややかな視線で僕を射すくめる。あまりの冷たさに僕は泡を吹いて気を失いそうだ。

「昨日も、一昨日もあたしをつけまわしてたでしょ」

良くご存じで。心当たりがありすぎる僕は後ろめたさで途端に彼女の顔を正視することができなくなった。

昨日や一昨日だけでなく金曜日の今日まで今週は毎日話しかけるきっかけを求めて僕は彼女を追い続けていたのだった。

西堀に期限を設定されていた。

今週中になんとかしてくださいね。

言葉は丁寧だが彼女の口調には反論は許さないという断固とした

強さがあつた。できなければ身の安全は保障しませんよ、と鋭利なナイフで顔を撫でられたような気分だった。半ば一方的に電話を切られてしまったから僕はあつという間に過ぎ去っていく一日一日を追い立てられるような気持ちで過ごしていたのだ。何で俺が、と考えないわけではない。放っておけば良いじゃないか。そうは思っても目ではずつと佐伯を追ってしまっていた。

「ストーカー？」

佐伯が気持ち悪いものを見るように顔を歪めるのを目の当たりにして僕は屈辱的な気分にも全身をわなわなと震わせた。全てはお前のせいだ。それなのにその態度は何だ。

「違う！」唾を飛ばしながら僕は身体を熱くする。僕は男として最も恥ずべき汚名に発奮しやつと佐伯の目を見返すことができた。「言っておきたいことがあるんだ」

「何よ」

訝るような低く冷たい声の佐伯はまだ僕をストーカーと思い込んでいるようだ。腕を組んで斜に構える彼女の心は非常に遠くにあることが分かる。千里の道も一歩から。とにかく一歩踏み出すことが大事だ。踏み出しさえすれば後はその繰り返しなのだから。

「今日も美術室で絵を描くのか？」

「そのつもりだけど、そんなこと美術部を辞めた人に関係ないですよ」

「それがあるんだよ」

「どうして？」

「どうしてって佐伯は美術部員じゃないのか？」

「カジカジには認めてもらったわよ。それは光太郎だって知ってるじゃん」

「だったらOBの言うことは聞いてもらわないとな」

「何それ？意味分かんない」

佐伯が面倒臭そうに眉間を曇らせ目を細める。

「部員にとってOBの言葉は絶対だ。それが部活動ってもんなんだ

よ」幽霊部員だった自分が部活動について語っているなんて僕が一番驚いていた。しかも口から出てくる理屈が筋が通っているのか甚だ自信がない。それでも言ってしまった以上後戻りはできなかった。僕はあるのかどうか分からないOBの威光を笠にしているつもりで言葉を続けた。「部活動は礼に始まり礼に終わる。佐伯は美術室に入るとき、出るときに挨拶をしてるか？」

「そんなことを言いたくてストーカーしてたの？」

呆れたようなため息交じりの声。

「だから違うつて。挨拶の話は例えばってこと。部に入ったんなら部員同士仲良くするのは当たり前だろ。美術部は一人でやってるわけじゃないんだ。部長や部員に自己紹介ぐらいしたのか？」

「絵を描くのは個人。自分以外他に誰もいらさない。あたしに指導できそうなレベルの人はいないし、話し相手がほしくて美術部に入っただけじゃないんだから今のままで何の問題もない」

佐伯が低い声で押し通す主張に思わず頷いてしまいそうになる。しかしここが踏ん張りどころだ。

「佐伯に問題がなくても周りは問題だと思ってるんだよ。佐伯が美術室で使ってる画材は部員がお金を出し合って買ったものだ。部費は払ってるのか？誰の許可をもらって画材を使ってる？美術部には美術部なりのルールがあるんだよ。それが守れなきゃ部員じゃないし、部員じゃなければ放課後に美術室は使えない」

言い終わった後の声の響きに爽快感があった。ストーカー呼ばわりを辞めさせたい一心で思いつくままに言葉をつないだが、佐伯相手にこれだけ開き直れるとは思ってもよらないことだった。これだけ言えばさすがの佐伯も少しはしゅんとなって可愛げのあるところを見せるのではないか。

「くっだらない」

へ？

「あたし、美術部辞めるわ。誰に唆されたのか知らないけど光太郎も御苦労さまだったわね」

手をひらひらと軽やかに揺らし余裕の頬笑みを残して彼女は僕に背を向け階段を降りていった。

こんな展開になるとは。

部費は幾らなのか。部長は誰がやっているのか。

あれだけ言えばそういつた美術部に在籍し続けるための質問が返ってきて当然だろう。そう思い込んでいた僕は返す刀ではつきりと袈裟掛けに斬られたようなぐうの音も出ない敗北感にしばらく呆然と立ち尽くすだけだった。

千里の道は途中で途絶えていたようだった。気が付けば踏み出した足を置く場所がなく暗闇の奈落に真つ逆さまだ。

どれぐらい僕はぼうつとしていただろう。真つ暗闇の中にいると思っていたがいつの間にか目の前には校舎の白い壁があった。当然ここは美術室前の廊下だ。

とりあえず、だ。とりあえず責任は果たしたと思えば良いだろう。西堀が求めている結果には至らなかったが、佐伯が部を辞めれば彼女が部員から責められることはなくなるのだから彼女もほっとするに違いない。

僕もこれ以上佐伯のことで誰かに何かを求められるという事態は降りかからないという意味ではこの展開は大成功だったのではないか。

そうだ。そうに違いない。

僕はようやく自分なりに状況を良い方向に解釈することができて顔を起こした。

そこへ不意に背後から何かがぶつかってきた。その衝撃に膝から崩れそうになって慌てて壁に手をつき身体を支える。

「佐伯と何話してたんだよ？」

振り返ると陽平の顔がそこにあった。いつから居たのだろうか。

お前も隅におけないな、とにやけた口角のあたりが言っている。

「別にたいしたことじゃないよ」

「そんなことないだろ。佐伯が行っちゃった後のお前は完全に腑抜

けになってたぞ。振られたのか？」

「そんなんじゃないっ！」

「ストーカーの次は失恋男か。馬鹿馬鹿しい。」

僕は何もかもが面倒になって陽平を置いて階段を降りていった。

今の僕はこの場に倒れこみたいほどクタクタで口をきくのも億劫なくらいなのだ。

慌てた感じで陽平が追いかけてくる。

「怒んなよ、光太郎。悪かった、冗談だっつて」

「別に怒ってない」

反射的にそう言ったが頭はカツカして鼓膜のあたりがぼわんとしている。

「見るからに怒ってるよ。お前にしては珍しく」

「陽平がからかうからだろ」

「だから悪かったっつて」

階段の踊り場で僕は大きく深呼吸した。

少し冷静になろう。陽平と喧嘩しても仕方がない。

「佐伯が美術部に入りたいって言うから顧問のところ以案内したんだけどさ」

僕は歩きながら陽平に事の成り行きを説明した。しかし喋っているうちにまた胸のあたりに血が滾ってくるようだった。

西堀の責任転嫁する強引さ。佐伯の人を小馬鹿したような態度。

女子というのは皆どうも鼻持ちならない存在に思えてくる。

「そっか。そりゃ、俺でも頭にくるわ」

「だろ？ほんとむかつくんだよ」

僕は激しく陽平に同調した。

やっぱり男は話が分かる。陽平がそう言うのだから僕が憤るのは間違っではないのだ。西堀に対しても、佐伯に対しても。

「でも良かったよ」

陽平が前を向いたまま安心したように表情を緩める。

陽平が良かったと思うのならきっと僕も良かったと思うだろう。

そう思わせるほど陽平の笑顔は尊さを感じさせる。

「何が？」

「光太郎が佐伯のこと好きじゃなくて」

「どういうこと？」

「もしそうだったとしたら、俺と佐伯が付き合うことになったら、光太郎が可愛そうじゃん」

「は？」

「いや、俺、最近佐伯のこと良いなって思ってた気になってるんだ
えー！

僕は思わず立ち止まって声を上げていた。驚きだった。陽平が佐伯のことを好きだということ、陽平が沙織のことを好きじゃないということに。

「声が大きいつて」

陽平が手で僕の口を押さえるような仕種をする。その顔が朱に染まっていた。

陽平は本気なんだ。そう思ったとき僕は一つの疑問を口にした。
た。

「沙織はどうするの？」

「どうして沙織が出てくるんだ？」

陽平がきょとんとした表情で首を傾げる。

「だって、陽平は沙織と付き合ってるんでしょ？」

「は？付き合ってるねえよ。どうしてそうなるんだ」

陽平はいかにも心外という感じで吐き捨てるように否定した。

しかし、陽平と沙織が恋仲だというのは学年の常識のようなもので、そう思い込んでいたのは僕だけじゃないはずだ。仲良さそうに話している二人を見て悔しいけれどお似合いだと校内の至る所で囁き合っているのを耳にする。

あの親密な様子で付き合っていないのだということなら僕の中の「お付き合い」の定義が根底から揺らいでしまう。

果たして沙織は陽平のことをどう思っているのだろうか。彼女の

方は付き合っているつもりなのではないだろうか。

「さては、光太郎」

「何？」

「お前、沙織のこと好きなんだろ」

今度は僕の顔が赤らむ番だった。

沙織のことは可愛いと思うが、好きという感情にまで至っているのかどうかは自分でも分からない。しかし、面と向かってそう言われると恥ずかしくて身体が熱くなる。

「そうかそうか。よしよし、俺が何とかしてやるよ」

何が嬉しいのかにたにた笑って陽平が僕の肩を抱く。

「いいって、そんなこと」

僕は慌てた。何かにつけて積極的な陽平には分からないだろうが、こういうことは人知れず慎重に動きたい。ましてや今は自分の気持ちもはっきりしないのに自分以外の人間に勝手なことをされてははっきり言って迷惑だ。

「遠慮するなつて。任せとけよ」

僕から逃げるように陽平が後ろ歩きで小走りしながら下駄箱に向かう。

「違うんだつて、本当に」

僕は何故か楽しそうな様子の陽平を追いかけてその肩越しに下駄箱にもたれている意外な人物を発見した。

長い髪。すらりとしたスタイル。僕は思わず表情を強張らせて足を止めた。

僕の視線を感じて陽平も立ち止まり背後を振り返る。彼も瞬時に四肢を硬直させたのがその背中からビリビリと伝わってくる緊張感で如実に掴めた。

「ちよつと話があるんだけど」

暗く鋭い目つきは完全に僕を捉えていた。ここで先ほどの続きをやるつというのか。

僕は全身の肌が粟立つのを感じた。彼女はきつと僕の言動を思い

出し腹に据えかねてここで僕を待ち構えていたのだろう。そして僕をこの場で八つ裂きにして血祭りにあげるつもりなのだ。僕は自分の首が白木の台にちんまりと載せられ玄関前に晒されている様子を想像して身震いした

「な、何ですか？」

声が喉に引つかかって上手に出ない。完全に不意を突かれた格好の僕は何の心の準備もできておらず思わず下手に出てしまっていた。こうなったら手は一つだ。三十六計逃げるに如かず。僕は逃走経路のイメージを頭の中で作り上げながら彼女が何を言い出すかその口の動きに注目した。

「このあたりで画材ってどこで売ってるの？」

彼女が視線を翳らせ苦り切った表情で呟いた言葉は彼女の口の動きに傾注していなければ聞こえないぐらいの小さな声だった。

地味だったろうか。

僕は自分の身体を見下ろして何度目かの溜息をついた。

何の面白味もない白地のアディダスのＴシャツにジーンズ生地
のハーフパンツ。まだ暑いからと足を出してみたのだがにゅるっと伸
びた生白い脛が、そこにまばらに生えているすね毛ができそこない
の大根のようで貧相に見える。スニーカーはお気に入りのニューバ
ランスだが、通学にも使っているので薄汚れていてどうにも冴えな
い。

仕方がない。

昨日、急に佐伯と画材屋に行くことが決まって服を買いに行つて
いる時間がなかったのだ。

そういう言い訳で自分を納得させてとりあえず今のところは待ち
合わせの駅の切符売り場前から逃げ出さないでいる。

時間的に余裕があったとしても恰好良い服装を調達できたかどう
かは甚だ疑問だった。どういったものが女子に受けが良いか皆目見
当がつかない僕が時間に追われ一人で買い物に出かけあれこれ手を
出したところで良い結果につながるとは思えない。普段から外見に
もう少し気を遣っていればこういうことにはならなかったのだが。

せめて靴紐ぐらいいは、としゃがみ込んで一度ほどいてからきれいに
結び直す。ここに来て三度目の仕種だ。

「仁科君、早いね」

呼びかけられてハツと顔を起こすとミニのワンピースから伸びた
柔らかかそうな白く輝く脚が目に飛び込んできた。さらに視線を上げ
ると……そこには沙織の笑顔があった。

「こ、こんにちは」

素早く立ち上がると頭がフラツとした。緊張で血の気が失せる。
盆の窪辺りが寒くなる。気を抜けば遠のきそうになる意識の尾を必

死に手繰り寄せ何とか挨拶代わりに白目を剥くような状態だけは回避した。

これまで一緒のクラスになったことのない沙織と話をするのはこれが初めてだ。彼女が僕の名前を知っていたことが嬉しくもあり不可解でもある。

それにしてもどうしてここに沙織が？偶然？それとも……。

「私、隣のクラスの栗山沙織。今日はよろしくね」

ぺこりと頭を下げる。僕もつられて同じ動作をした。

「くえ？」

頭を起こすと同時に僕は思わず鶏が首を絞められたような素っ頓狂な声をあげていた。

事態をうまく理解できない。よろしく、ということは彼女も一緒に画材屋に行くということなのか。

佐伯が彼女を呼ぶはずがないから、誘ったのは陽平ということになる。何のために……と考えたところで僕はカツと胸から首筋が熱くなるのを感じた。陽平が言っていた「何とかしてやるよ」がおそらくこれなのだ。あの野郎、余計な真似を。

「顔赤いよ」

「そ、そう？」

僕と沙織は切符売り場とジュースの自動販売機のわずかな隙間に並んで立った。

「やっぱり陽平君はまだよね」

沙織が確認するようにあたりを見回す。僕は黙って大きく頷いた。腕時計を見ると待ち合わせの時間までまだ十分もある。時間にルーズなところのある彼が現れるにはまだ間があるはずだ。そう考えると沙織と二人きりの時間がすごく重いものに思えてきた。

沈黙が続く。秒針がゆっくりと進む。

沙織が現れてからのどが渴いて仕方がない。舌の奥が粘って声が渋滞してしまう。

陽平が現れるまでどんな会話をすれば良いのか。そして……。佐

伯が到着したらますます何を話せば良いのか分からない。こんなことなら僕も時間ぎりぎりに来れば良かった。

とりあえず自動販売機でコーラのペットボトルを買う。蓋を捻るといつものシュワツと炭酸が弾ける爽やかな音がしてそれだけで少し救われたような気分になる。何となく耳からの刺激で脳の動きが活性化された感じがしてくる。可愛いワンピースだね、ぐらいの月並みではあるが僕にとっては歴史的な褒め言葉がするりと口をついて出そうだった。

「私ね、陽平君のことが好きなの」

占いにはまってるの、程度の軽い口調で沙織はさらりと僕に重大なことを告白した。

「そうなんだ」

僕は一瞬蓋を開く手を止めたが、自然な相槌を打っていた。不思議と心は冷静だった。

やっぱりね、そりゃそうだよね、という気分だった。悔しいとか残念とかいうネガティブな感情は一切なかった。気持ちいいぐらいの感覚すらある。

それはきつと僕が沙織に対して抱いていた淡い好意の正体が遠巻きに眺めて知っている彼女の外見に対してだけの薄っぺらい好感でしかなかったからなのだろう。テレビに映るアイドルに覚える気持ちと同じだ。僕はまだ栗山沙織という女性を確固として好きだと想っているわけではなかったのだと思っただ。それとも時間が経つにつれてこの告白がじわじわと麻酔が切れかけてきた傷口のように僕の心に痛みをもたらすのだろうか。

「だから、仁科君がもし私のことを・・・」

「違うよ」

「え？」

「陽平に俺が栗山さんのことを好きだみたいなことを吹き込まれたのかもしれないけど、それは陽平の早とちりと言うか一人合点なんだ」

僕はコーラを口に含む。冷たい火花のような刺激が喉を潤している。自棄に見えないようにゆっくりと口から離れたペットボトルの蓋を閉める。しっかりと閉めたペットボトルはうっかり手から滑り落ちても中身は一滴も零れることはない。

「そう。だったら私失礼なこと言っちゃった。ごめんなさい」

彼女は僕に深々と頭を下げた。背筋を伸ばしたきれいな姿勢で。

僕は誰かからこんなにきちんと謝罪されたことがなく、しかもあの校内一美人の栗山沙織に許しを乞われる状況に漸くあたふたと慌てた。

「ちよつと、そんなに謝らなくてもいいよ。元はと言えば陽平が悪いんだし」

顔を起こしても沙織は申し訳なさそうな顔を崩さなかった。九回裏にサヨナラエラーをしてしまった甲子園球児ぐらい悲壮感が漂っている。

「陽平君は悪くないの。昨日陽平君に誘われたときにメンバーを聞いて私が勝手に想像しちゃったの。私こそ一人合点」

「メンバーを聞いただけで僕が栗山さんのことを好きだと思ったの？」

「だって、陽平君は佐伯さんのことが好きなのにわざわざ私を誘うってことは、そういうことなんだろうなって」

「知ってたの？」

僕は思わずそう訊いてから、しまった、と唇を噛んだ。今、僕は陽平が佐伯に好意を持っているということを暗に認めてしまったことになる。しかし、引き金を引かれた銃弾のように一度発した言葉は取り戻せない。僕の不用意な言葉は沙織の胸に深く突き刺さっただろうか。

「陽平君はサッカー馬鹿だから考えてることはすぐ分かっちゃうのよ。佐伯さんが転入してきてからあの人変わったもの。でもね、私の気持ちはそう簡単には変えられないのよ」

そう言っただけで虚空を睨む沙織の顔は同学年とは思えないほどきりり

と引き締まっついて格好良かった。これが人を好きになっっている人の顔かと思つた。どこか不安げで、だけど退くことはできないという必死さと気迫が漲っているようだ。そこには男には真似のできな
い芯の強さがあるようだ。よくテレビ番組なんかで「男は女には敵わない」という言葉を耳にするけれど、その意味が分かつたよう
な気がする。

そして彼女の鋭い観察力と洞察力には脱帽だつた。沙織は熱いだ
けでなく冷静さを兼ね備えている。

「ね、ね、ね。じゃあさ、じゃあさ」

急に彼女が何か楽しいことを思いついたようなキラキラ輝く瞳で
僕の顔を覗き込むように見つめてくる。

「何？」

その上目遣いでまっすぐな瞳があまりに澄んでいて僕は初めて陽
平に嫉妬を覚えた。至近距離でそんなに見つめてこないで。僕は目
を合わせていると石にされてしまいそうな感じがして慌てて視線を
ずらす。畜生。目茶苦茶可愛いじゃないか。

「仁科君は佐伯さんのこと好き？」

「は？それはない」

僕は少し鼻白む思いでコーラをぐびぐび飲んだ。

あんな勝気な女、好きなはずがない。僕のことをストーカー呼ば
わりしやがって。

そもそも何であいつの買物に付き合わなくてはならないのか。

陽平もあんな傲慢な女よりも沙織と付き合つた方が楽しいに決まっ
ているのに、本当に馬鹿だ。

「そっか、残念」

「どうして？」

「だって、もし仁科君が佐伯さんのこと好きだつたら、佐伯さんを
陽平君に取られないようにしたくなるわけじゃない？それって私と
利害関係が一致するもん。仲間になれるところだつたのに」

沙織と仲間か。それって悪くない。いや、すごく楽しそう。

僕はたった数分の会話で学年のアイドルとの距離がぐつと縮まった感じがして嬉しかった。沙織と恋人同士になるなんて想像するだけで気後れしてしまうが、彼女の方から仲間だって言ってくれるなら僕は喜んで彼女の援護射撃をするつもりだ。

僕は残ったコーラを一気に飲み干し清涼感たっぷりです織に向き直った。

「俺、栗山さんのこと応援するよ」

「ほんと？ありがと！でも、仁科君は陽平君にも同じようなこと頼まれてるんじゃないの？」

陽平が僕みたいなイケてない凡人に何かを期待するはずがないし、もし頼まれたとしたら僕も何をしたら良いのか分からず困ってしまう。

「そんなこと言い出すような奴じゃないよ。自信満々だもん。それに陽平には栗山さんがお似合いだって。あいつなんかより断然」

僕の中の沙織のイメージが変わりつつあった。清纯派の世間知らずのお嬢様だと思っていたのだが、恋の駆け引きみたいなことに挑戦しようっていう姿勢は僕よりも断然大人だ。

しかし恋愛の成就のためにひたむきな姿勢を見せる彼女は僕の中で今までとは違うベクトルにだがお一層好感度が上昇した。

「あいつって？」

低い声に振り向くと自動販売機の陰からぬつと佐伯が姿を現して僕は背筋を鉄柱で貫かれたように直立不動で立ちすくんだ。今度こそ本当に石になりそうだ。まともに佐伯の顔を見ることができない。

「い、いつ来たの？」

思わず訊いてしまっていた。

いつからそこにいたのか。どこから話を聞かれていたのか。

互いの心音が聞こえそうなくらいに隣り合っている沙織も表情を失っていて声を出すこともできないでいるようだった。

「今よ。時間でしょ？」

反射的に腕時計を見る。確かに待ち合わせ時間にジャストのタイ

ミングだ。

「丁度だね」

「ほんと、ぴったり」

ハハハ。フフフ。

僕と沙織は顔をぴくぴく引きつらせながら何もおかしくないのに見つめ合って笑い合う。互いに笑うしか術がなかったようで僕たちは何度も何度も頬の筋肉を持ち上げた。

挙動不審の僕たちに冷やややかな視線を送りながら佐伯はゆっくりと切符の券売機に向かった。

スキニーなジーンズに胸元が大きく開いたベージュのカットソー。色合いは地味だが彼女のスタイルの良い身体のラインをすっきりと見せていて中学生とは思わせない落ち着きが漂っている。

彼女と二人きりで買い物にならなくて良かったと心底思う。僕と佐伯が並んで歩いていたら道行く人にはどんな風に見えるのだろうか。本当にこいつ僕と同じ年かよ。

「いくら？」

値段を答えようとしたら胃の奥からコーラの香りの大きなげっぷが出てしまった。慌てて口を抑えるが時既に遅し。僕をストーカーと訝しんだときと同じ冷淡な目で佐伯に睨まれる。ああ、もう石にでも何でもしてほしい。

「次の次の駅だから210円よ」

沙織も緊張が抜けないのか少し声が上がっているように聞こえる。私も買わなくちゃ、と明るく独り言を言いながら沙織が佐伯の隣の券売機に小銭を入れる。

「光太郎」

「何？」

「この人どなた？」

気だるそうに沙織を指した細い指の爪が透明に光っているのはマニキュアを塗っているのだろう。それが少しも大人ぶって見えないのが彼女のすごいところだ。

「栗山沙織さん。同じ学年で隣のクラスの」

切符を手にした沙織が、栗山です、と恭しく頭を下げる。

「光太郎が呼んだの？」

沙織のお辞儀を無視して佐伯が僕に不機嫌そうに問いかける。

「ごめんなさい。私が勝手に押しかけて来たの。話を聞いて楽しそうだなって思ってた」

仁科君は悪くないの、という感じでにこやかに友好的に沙織が僕の前に立つ。

陽平に誘われたのに恋敵の佐伯に対して陽平のマイナスになりそうなことを口にはしない。そこに沙織の度量の大きさと清らかな性格が垣間見える。

「楽しそう？画材買いに行くだけだよ」

「私もどんな画材があるのか見てみたいなって。いいでしょ？」

別にいいけど、と呆れ気味に許しが出て僕と沙織は一瞬視線を交わし互いに安堵の表情を見せ合う。

「じゃあ行くうよ。光太郎、何分の電車？」

「ちよつと待って。陽平がまだ来てない」

腕時計を見ると待ち合わせの時間を三分過ぎている。

「いいじゃん。待ち合わせの時間はもう過ぎてるんだし来ない人が悪いんだから」

「それはそうだけど、せつかくなんだからもう少し待ってあげようよ。ねえ、栗山さん」

「もうすぐそこまで来てると思うの。私、電話掛けてみるね」

沙織は肘にかけていた鞆から携帯電話を取り出し僕たちから少し離れていった。

耳に電話を押し当て、小首を捻り、ボタンを操作しては再び耳に当てる。同じ動作を繰り返していることからしてなかなか陽平がつかまらないようだ。

「昨日から理解できないんだけど、マツは何でついてくるの？美術部OBでもなければ絵が好きなのでもないんでしょ？」

佐伯がいらついたような口調で僕を責める。マツとは松本陽平のことに違いない。

「言つてたじゃん。画材屋のそばにサッカーグッズの大きな店があつて、そこでスパイクを買うらしいよ」

僕だつて苛立つてくる。どうして僕が陽平のために佐伯の攻撃にさらされなくてはいけないのか。どうしてあいつは時間どおりに行動できないのか。

「だから、別にあたしたちと一緒にに行く必要ないじゃん。スパイクでも何でも一人で買いに行けばいいでしょ？」

「そりゃそうだけど。俺、口下手だから俺と二人でいてもきつとつまらないよ。みんなで行つた方が楽しそうじゃん」

「別に楽しくなくなつていいの。画材を買つて帰るだけなんだから」「そう言うなつて。部活はみんなでやるもんだよ。これもその練習だと思つてさ」

「光太郎はいつもそういうこと言うけどさ、前の学校じゃそんなこと言われたことないよ。部活動がどうか、チームワークがどうか」

「郷に入つては郷に従へつてことだよ。うちの美術部はチームワークも重視してる。そういう学校ごとの校風も取り入れるのが部活動なんだよ」

佐伯はむすつとした表情で押し黙つた。

完全に口から出まかせなのだが部活の一環だと言えば彼女は大人しくなる。彼女なりに一応、僕のことを部のOBとして、あるいは美術に敬意を表している人間として尊重してくれているからなのだろう。しかし……。それも僕が幽霊部員だつたことがばれるまでだ。事実が知れたら僕はただでは済まないのではないか。何とか中学校を卒業するまでは佐伯の前ではアートを愛する人間の振りをし続けなければならない。

「サオリン、つながつた？」

佐伯がなれなれしく呼びかけると沙織が俯き加減で戻ってくる。

「全然出てくれない」

しょんぼりを絵に描いたような肩の落とし方だ。背中に疫病神が憑いていないか目を凝らしてしまう。

遠くから踏切が鳴る音が聞こえてきた。電車が近づいてきている証拠だ。この電車を逃すと三十分近く待たなくてはならない。

「タイムオーバー」

佐伯は一人で改札を通っていく。もはやその背中を引きとめる言葉が出てこず僕と沙織は黙って見送るしかなかった。

ホームへ向かう彼女の背中を見つめる僕の心に一つのアイデアが浮かんでいた。

自動改札機が二台しかないこんな小さな駅で待ち合わせに失敗することはあり得ないし、いくら時間にルーズでも陽平は何の連絡もなしにすっぱかすような男ではない。とすれば沙織にここに残ってもらって僕が佐伯と二人で買い物に行くというのはどうだろうか。

今から佐伯と二人きりになるのは肝が冷える思いだが、やがて現れた陽平は沙織と行動を共にすることになる。僕たちを追いかけて電車に乗るもよし、諦めて別のデートするもよし。どちらにせよ陽平との仲を深めたい沙織にとって悪い状況ではないに違いない。

「栗山さん、あのさ」

「仁科君」

沙織も同じことを考えていたのか、僕が何も言わなくても彼女はこくりと頷いた。

そのとき僕と沙織の間にぬっと黒いものが割り込んできた。

「いい雰囲気のところぶち壊してごめんよ。行こうか」

陽平だった。僕と沙織の肩に手をまわしてまるでいなくな馬をなだめるようにぼんぼんと叩く。

「行こうか、じゃねえよ。電車が来ちゃうだろ」

「だから行こうって言ってるんだろ。さ、早く、早く」

これ、と沙織が陽平に切符を差し出す。彼女はあらかじめ二枚買っていたのだ。クー。何と甲斐甲斐しいことだろう。目頭が熱くな

るのを禁じ得ない。

しかし陽平は当たり前のような顔で「サンキュ」と受け取り、さつさと改札を抜けていった。

「陽平！」

僕が怒鳴るように声を出すと沙織が僕のＴシャツの裾を軽くひっぱり、眉を八の字にして小さく横に首を振った。その「これも惚れた弱みなよ」というような諦めに似た表情に僕は何も言えなくなる。

余裕を持って予定時刻より前に来て待つ僕と沙織。精密機械のように時間きつかりに現れた佐伯。遅ればせに駆けつけるも電車にはギリギリ間に合わせる陽平。

とにかく無事出発できそうで一息つくと待ち合わせにもそれぞれの性格が出ていて面白いような気にもなる。

「じゃあ、行こうか」

「仁科君、お先にどうぞ」

「いや、ここはレディファーストで栗山さんがお先に」

僕と沙織が改札の順序を譲り合っているとホームで陽平の大きな声がこだまする。

「ちんたらしていると置いてくぞ。何やってんだよ」

ちやつかり佐伯の隣に身を寄せるように立ってこちらに手を振っている陽平を見て僕と沙織は盛大にため息をついた。

到着を知らせる警笛が鳴り響きホームに電車が滑り込んできくと沙織は慌てて駆けだした。

見慣れた車が正面からやってきて僕たちの背後に通り過ぎていく。ほんの一瞬の出来事に僕の心は千々に乱れた。

何故？どうして？

「どうしたの、仁科君」

僕の異変に気付いたのは沙織だった。

僕は必死に表情を取り繕い口角を上げた。

「何でもないよ。さ、早く行こう」

西の空を指さして前進を促す。そこには大きなビルの外壁に設置されている観覧車がゆったりと回転していた。この様々なシヨップがテナントとして入っているビルは去年建てられたときからシンポルの観覧車で大きな話題を呼んだが、ここにいる四人の誰もまだ乗ったことがなかった。

一通り買い物を終えたとき「記念にあれに乗ろうよ」と高らかに提案したのはもちろん陽平だった。

僕は佐伯の様子を窺った。おそらく彼女は「子供じみたこと」と小蠅を追い払うような仕草で却下するだろう。そんな僕の予想を見事に裏切って彼女があっさり「いいよ」と同意したことで僕たちは彼岸の時期に一向に弱まらない日差しの下をてくてく歩いてきたのだ。

「栗山さんは観覧車好きなの？」

精一杯テンション高く沙織に話しかける。

「そうねー」

実は高所恐怖症なのよ。でも、ここは退けないでしょ。

沙織が僕に耳打ちするように小声で答えてから決意の眼差しで目前に迫った鉄の塊を見上げる。そしてその視線をライバルに向けた。

「佐伯さんはどう？」

「あたし、馬鹿だからね。煙と一緒に」

佐伯が余裕の笑みを浮かべるのを見て沙織はさらに表情を強張らせた。

マジかよー。

先頭を歩く陽平がうんざりした声を出す。

「一時間待ちだつてよ」

振り返った陽平は恨めしそうにギラギラ照りつける太陽を見上げた。

前方を見遣ると乗り場のある二階から延々と人の列が続いていて僕たちの目前に「ここから一時間待ち」というプラカードを持った店員が立っていた。

とりあえずそのまま列の最後尾に並んでみたものの日除けのない歩道の上でこれから一時間立ち続けるといふ状況に僕たちは悲壮感漂う顔を突き合わせる。

「どうする？」

言い出しつぺのくせに陽平が手の甲で額の汗を拭きながら弱々しい声を出す。

しかし、列に並ぶ人たちの一様にうんざりした顔を見るとここは確かに思案のしどころだ。

軽いノリだったのに荒行、苦行のようになっては誰かさんの機嫌を損ないかねない。そんなことになってはせつかく四方に注意を配って慎重に築き上げてきた今日という時間が台無しになってしまう。それはきつと陽平や沙織も同じ気持ちだろう。

「いいじゃん、一時間ぐらい」

軽い調子で計画続行を訴えたのはまたもや意外にも佐伯だった。

一人涼しい顔で遠いところから眺めるように僕たち3人の顔を見渡す。

「そつだよな。ここまで来たら乗らずに帰る方が後悔する。よし、絶対に乗るぞ！」

陽平は簡単に佐伯に靡いた。それを見た沙織も作ったような笑顔を浮かべて頷き日差しを遮るように額に手をかざした。

佐伯は歩道わきに設置してある自動販売機でペットボトルのウーロン茶を購入し飲みながら戻ってきた。彼女もこの暑さがつらくないはずがない。彼女の首筋にも汗が浮かんでいたが列の前方を見据えるその目には暑さになんか負けず絶対に観覧車に乗るんだという意気込みが感じられるようだ。

こいつ実は内心ものすごく観覧車を楽しみにしているな。平静を装っている心の奥を見つめるように僕は佐伯の横顔に注視した。

しかし、僕の視線に気づいた佐伯に見つめ返され僕は慌てて目を陽光が照り返す歩道に落とす。

黙って一点を見つめていると先ほどの映像が僕の頭の中でフラッシュバックする。

先ほどの車は父が運転していた。そして助手席には運転席に向かって熱心に話しかける坂本先生。

それだけのことと言えはそれだけのことだ。
父が勤務する博物館はこの駅のそばにある。

坂本先生の専攻は日本史で以前から父の博物館での仕事や発掘の進捗状況に興味があった。

土曜日の今日、父は久しぶりの休日出勤ということで平日と同じ時間に起きて出掛けて行った。前もって予定していたのか偶然なのか博物館を訪れた坂本先生と父がこの暑さに耐えかね喫茶店で喉を潤すために車で向かって僕らとすれ違っただけ。大方そんなところなのだろう。何もおかしくない。

それなのに僕の心はささくれている。それは何故か。

「仁科君。大丈夫？少し顔色悪いよ」

沙織は周囲に気を配れる素晴らしい女性だ。摘み取ったはずなのに根が残っていたのか彼女に対する恋情の芽が僕の心の表面から顔を出す。

「ありがとう。大丈夫だよ」

「脱水症状かもよ」そう言って佐伯は手にしていたペットボトルを僕に向かって差し出した。「ほれ。水分摂った方がいい」

こいつ意外に良い奴なのかもしれない。

僕は反射的に佐伯の優しさに手を伸ばそうとした。しかし、すぐ脇から殺気のような気配を感じて瞬時に僕の体は凍りついた。

折角の申し出なのだが陽平の目の前で佐伯が口づけたペットボトルを受け取り渴きを潤すことは大いにはばかられる。もしそんなことをしたら冗談ではなく観覧車の上から陽平に叩き落とされる可能性が出てくる。

「ありがとう。でも俺も買ってくるからいいよ」

そう言うのと漸く陽平の目から人を縛りつけるような力強さが失せた。

僕は急に金縛りから解き放たれたように四肢に動きを取り戻して喘ぎながら自動販売機に向かった。

硬貨を入れ迷うことなくコーラのボタンを押す。

ゴトン。

商品が取り出し口に落ちてきた音と同時に僕の頭にも先ほどの自分への問いかけに対する答えが降りてきた。

生臭かったのだ。父の横顔を見つめて話しかける坂本先生とその言葉にゆったりと笑う父。車の中で談笑する二人の様子が僕の目には保護者と担任教師という関係以上に親密に見えたのだ。

ペットボトルを手にして振り返るとそこには陽平を眩しそうに見上げる沙織がいて、何やら熱心に佐伯に話しかける陽平がいて、面倒臭そうに口を開く佐伯がいる。複雑な三角関係に嵌りこんでいる三人の男女だ。

しかし、彼らよりも父と坂本先生の間から漂う空気ははるかに濃密でねっとりしていた。それを思いがけず吸い込んだ僕は毒気にあたり呼吸困難に陥ってしまったのだ。

胸が痞える。肺が上手に酸素を取り込めない。苦しくて立ってられない。

やはりこれ以上とてもみんなの前で笑ってられない。それに僕のせいでこれからの雰囲気壊すのは嫌だった。

「ごめん。悪いんだけど先に帰るわ。俺のことは気にしないでみんなで遊んでて」

「急にどうしたの？やっぱり体調悪いの？」

沙織が不安げに訊ねてくる。その表情は僕の調子を心配するのと同時に、この場から僕という味方を失うことを危惧しているようだった。

僕は力なく首を横に振って否定する。

「ちょっと用事があるんだ。本当にごめん」

協力すると言ったのにこんなことになって沙織には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。僕は買ったまま蓋も開けていないコーラを強く握りしめた。

「用事があるんじゃ仕方ないな」

陽平がスパイクが入った買い物袋を肩に担ぎながら訳知り顔で僕に視線を絡ませてくる。ここは任せておけ、と目が言っている。

僕はその視線を避けるように力なく項垂れた。

陽平は僕が母さんの見舞いに行くと思っっているようだ。それはあながち間違いではないが、時間はまだ大分早い。

しかし、彼の憐れむような表情に母さんを強く意識させられて僕の心はさらにずぶずぶと沈み込んだ。

さっきの父と坂本先生を見たら母さんはどう思うだろうか。

嫌でも浮気の二文字が僕の頭を過ぎる。いくら楽天家の母さんでも自分が不自由な体で入院している間に夫が息子の担任教師と深い仲になっているかもしれないと思ったら笑い飛ばすことなんてできないだろう。

母さんが可哀そうだ。僕はやり場のない怒りを込めて拳を握り締めた。

「急に用事って何だよ？」

僕はその一言に背筋を凍らせた。

せつかく高揚していた気分が水を差されたのが気に入らなかったのか佐伯が不機嫌そうに眉根を寄せている。

「用事は用事だから仕方ないじゃん。観覧車は三人で乗っても楽しいぞ。どういう風に座る？今のうちに決めようぜ」

黙りこくった僕を気遣うように陽平が場の雰囲気を取り繕おうとする。

「私、高いところ怖いし一人は嫌だな。陽平君の隣がいい」

おどけた感じで沙織が手を挙げるが、目は笑っていない。ここが勝負所と踏んだのだろう。いいかな、と陽平にはなく佐伯に問いかけるあたりが策士だ。佐伯が沙織と争って陽平の隣に固執するはずがない。佐伯が了解してしまえば陽平に巻き返す場面は回ってこないだろう。

「マツ、光太郎の用事が何か知ってるな」

佐伯は沙織を無視して強引に話を戻した。佐伯の剣幕に陽平がたじろぐ。

「それは、その……」

「病院に行くんだ。母親が入院してるから」

僕は三人の前に放り投げるようにそう告げるとすぐに踵を返した。語尾が震えたことを気付かれただろうか。背を向ける前にすでに目が潤んでいたことを悟られただろうか。

僕は逃げるように早足でその場を離れ容赦なく降り注ぐ日差しの下を駅に向かって歩いた。

どうして僕が嘘をつかなくてはいけないのか。母さんのことを出してまでして皆をだますなんて。

悔しさと腹立たしさが募って叫び声をあげたくなる。胸に迫ってくるものをぐっと押し殺しているとは高温多湿でふやけた頭がさらにおかしくなりそうだ。

気がつけば止めどなく涙が頬に伝い落ちたていた。しかし僕の背中を三人が目で追っていると思うと拭うことさえもできなかった。

僕はペットボトルの蓋を捻り冷たいコーラを無理やり喉に流し込んだ。慣れ親しんだ甘さの中に今は微かに苦みが感じられた。

母さんはベッドで静かに寝息を立てていた。疑いや偽り、裏切りといった人の醜さなど知らないような悲しいぐらい穏やかな寝顔だ。眠っている時、人は誰もがこんなに柔らかで無垢な表情をしているのだろうか。

両親はいつも僕が目覚ます前に起きていて、僕が寝入る頃もリビングにいた。だから一人っ子の僕はこれまで家の中で誰かが寝ているのを見ることはなかった。ペット禁止のマンション住まいなので犬が寝そべっている姿すら目にするのがない。

丁度二年ほど前に母さんが交通事故にあって入院することになったから僕は毎日のように母さんの寝顔を見るようになった。

眠っている母さんはいつも口角が少し上がっているような優しく、あどけない面ざしをしている。その顔を病室で見下ろすたびに僕は少し寂しいような切ないような気持ちになる。

母親を看病するなんてもっともつと先のことだと思っていた。僕自身が年を取り、その分母さんも老齢になって入れ歯を使い腰が曲がり膝が痛くなって、そうなって初めて「母さんももう年だから仕方がないよ」と諦めとも言える笑いを浮かべ昔の思い出を語り合う。そんな介護の場面は臆に想像することができたが、小学校を卒業して間もなく病院通いが始まるとは思ってもみなかった。

青白くかさついた感じはあるがまだ十分に若々しい肌をした母さんが病室のベッドで横になっているのを中学生の僕が眺める。それは間違いなく目の前にあるのに今でも現実として受け入れがたい、否定したくなるような景色だった。僕にとっての母さんは家で僕の帰りを待っていてくれる温かくて柔らかい存在であるはずだったのに。

一時間ほど経っただろうか。母さんはゆっくりと目を覚ます。僕を見つけると軽く目尻を下げて、ありがと、と口を動かす。

「光太郎、何かあった？」

内心ドキリとするが表情は変えない。

「どうして？」

「泣いたんじゃない？目が赤い」

女という生き物はどうしてこつても洞察力に長けているのだろうか。母さんにしても、沙織にしても、佐伯にしても。ときにその鋭い観察眼で僕を全身麻酔がかかるほど驚かせる。

「ちよつとゴミが入ったんだよ。外は風が強くてさ」

「そう。ならいいけど」

母さんはじつと僕に注いでいた視線をゆっくり動かし窓を見やる。ベッドから見えるのは光をキラキラと反射させる青々とした葉っぱだけだ。

「少し散歩でもしようか？」

母さんと二人で歩くのは気恥しいのだが、狭い病室に二人きりであるのは今日に関しては気づまりだった。

「外は風が強いんじゃないの？」

母さんは窓の外を眺めている。木々は大きく揺れていない。

僕はぐつと返事に窮したが頭を巡らせた。

「風は南からだから中庭なら大丈夫だよ」

母さんは上体を起こしちよつとうんざりした顔を僕に向け首を横に振った。

「暑そう。日焼けしたくないし」

「たまには外に出た方が身体にいいんじゃないの？」

「じゃあ、日焼け止め買ってきて。あと、帽子もね。つばの広くて可愛いやつ」

「わがままだな」

「そう言えばこないだ買ってきてくれた雑誌にいいのがあったんだ。あんなのがいいな」

どこに載ってたかな、と母さんは雑誌を取り出しへらへらとページをめくる。

「何で俺がそんなの買ってこないといけないんだよ」

僕は慌てて思いつきで言ってしまったことを後悔していた。

ファッション誌で取り上げているようなものがどこで売っているのか僕は全く見当もつかない。しかも女性モノを買うなんて恥ずかしくてできるはずがない。

麦わら帽子でね、花柄リボンがついてるんだけど。母さんはもう僕の言葉に耳を貸そうとせず、ぶつぶつ独り言を言いながら雑誌の写真に没頭している。

僕は母さんを止めることを諦めてパイプ椅子から立ち上がり冷蔵庫庫から麦茶を取り出した。コップに注ぎ一気に飲み干す。

「光太郎」

「何？」

僕は喉が渴いていたらしい。空になったコップに再度麦茶を注ぐ。

「私のことが重荷になってたらごめんね」

母さんの言葉にびっくりして振り返る。

「何言ってるんだよ。重荷だなんて・・・」

「あーこれこれ。こんなのが欲しいの。かつわいいな」

母さんは僕に喋る隙を与えない。笑っているのか泣きそうなのか分からないような無理やり歪めた感じの表情で僕に雑誌のページを何度も指さした。

母さんを悲しませるような自分ではいけない。それだけは絶対に許されない。僕は自分の少し張りを失っていた心に活を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0326z/>

ジョーンブリヤン

2011年12月11日15時54分発行